

穢多駈騷動記

仲村研

ここに紹介する史料は、『穢多駈騷動記 全』（和綴じ本、以下同じ、便宜上Aと呼称す）、『穢多駈騷動記 後編』（Bと呼称す）、『瀬匪三稿』（Cと呼称す）、『瀬匪小記』（Dと呼称す）の四点があるが、そのうちのA・B・C三点を紹介することにした。

これらの史料はいずれも大徳子龍と名のる人が精力的に蒐集、編集したものであることは、各史料のあとがきで判明するところである。大徳子龍氏がこの問題に興味をもちだした理由は、いまのところ判然としないが、Aのあとがきにもあるように、明治中期に筆工に依頼して「下川原市場辺の人の蔵本」を筆写せしめているのであって、以来、大正末年までこの騷動記の異本を探求し、これをAと校合して文の抹消と補筆を繰返し、AⅡ「下川原市場辺の人の蔵本」と「市場山崎一平所蔵本」および「長瀬宮寺故村長蔵本」との校合の結果、編集したのがDであると考えられる。そのためDは大徳子龍氏の編集意図が濃厚に挿入されている形跡があるため、誤字が多く、かつ理解に苦しむ箇所が多々あるが、ここではDの原本としての意味を

もつAを紹介した。またCは大徳子龍氏がDをまとめるためのメモと事件の顛末を記したものと考えられ、またCのあとがきから、筆者大徳氏はこの事件について現地調査を行ない、丹念に聞きこみまで行なっていることが判明する。

昭和四十年秋、事件の発生地である埼玉県入間郡越生町、同郡毛呂山町長瀬および物見山岩殿観音へ調査のために赴いたが、現地にはこの事件についての記憶がほとんどない。ただその折の収獲は川越市史編纂室の岸伝平氏から大徳子龍なる人物についての談話を伺ったことである。岸伝平氏よれば、大徳子龍氏は同郡坂戸町森戸の人であって、聖護院派修験道の山伏であるとともに神官を兼職し、大我学舎という私塾を経営していたが、人望あって当地の農業会（産業組合？）長に推され、部下の汚職のために破産に追いこまれて不遇のうちに昭和初年に没したとのことであった。しかし、岸氏より何故に大徳子龍氏がこの問題の調査に執心したかを、お聞きできないのは残念であった。

『穢多駈騷動記』の事件は近世末解放部落史上、未解放部落側と権力の動員数、対立の深刻さ、未解放部落民の大量虐殺と

その方法等の点からいって屈指の大事件であると思う。しかし、この問題を部分的に紹介した研究は、大徳子龍氏もCに引用しているように、高橋貞樹(日本共産党創立当時のメンバー、水平社運動の理論的指導者の一人)の『特殊部落史』(B6判、三〇〇ページ、大正十三年五月発行、発行所京都市更生閣、初版は直ちに発売禁止、同年十月改訂版として再版されている)あるのみである。

ここに紹介する史料でこの大事件の全貌が明らかになるとは思わない。史料は案外入間郡一帯に眠っているかも知れないが、とりあえず、ここに紹介する資料から事件の底の深さを読みとっていただきたい。

二

事件の発端とその経過については『瀬匪三稿』の「小匪日誌稿」に、大徳子龍氏が要領よく整理しているが、いまここではその経緯のみを簡単に紹介しておきたい。

天保十四年癸卯七月二十二日、武蔵国入間郡長瀬村穢多辰五郎が同郡越生今市町日野屋喜兵衛方に売り残りの鼻緒を売らんととして、悶着が惹起したことに端を発している。翌日の辰五郎等五人の報復乱入、八月五日には越生町二十九人が、辰五郎はじめ七月二十三日に日野屋喜兵衛店に乱入した穢多を捕えんとして、逆に竹槍等で武装した穢多に包囲されてしまった。その間、近在の村惣代名主は協議して辰五郎等を関八州取締に訴え、穢多も浅草弾左衛門方へ応訴の願書を提出した。八月十一

日にいたり、関八州取締園部団(彈)次郎は近在の農民三百人余を召集し、銃炮三十五挺でもって、これまた近在から長瀬村へ馳せ参じた穢多仲間六百余人余を弾圧し、二十三カ村の穢多二百五十人余を逮捕した。同月十六日には事件後の警戒体制を嚴重にし、五十六カ村の夫八百三十余、銃炮百挺余をもつて事件の再発に備えた。そして取調方預りとなった百三十九人のうち、九十七名の囚人が七百人に護衛されて江戸送りとなり、八月二十六日から取調べが開始され、事件発生の翌々年、弘化二年乙巳四月最終の判決が下るまで継続された。その間、小刻みに判決が下ったものが多数にのぼるが、ほとんどのものが獄門・死罪・重追放・江戸払・敲のうえ中追放・所払・押込・手鎖・小頭役取放、叱の有罪を申渡され、うち半数が監禁中に死亡している。このことは『瀬匪三稿』の表に記載されているが、死亡者五十八人のうち四十九人が牢死となっている。その牢死は九月十六・十七日に集中しており、これは高橋貞樹氏も『特殊部落史』で指摘しているように、明らかに毒殺したと判断される。『瀬匪三稿』で大徳子龍氏も「帰村被差許タルモノニシテ、後二死者ヲ出ス、是亦牢死ニ準スルモノニシテ、放免ノ前夜ニ一服ノ鴆ヲ賜ヘルモノ故ニ、執レモ日ヲ同フシテ多ク斃ル、モノニシテ、其牢死ニ比スレハ、罪一等ヲ減セラレタルモノ、観アリ」と、釈放帰村後死亡したものが、釈放時に鴆毒を飲まされたことを指摘しているが、これは釈放、監禁の如何にかかわらず、獄門から手鎖の判決を受けたものまで虐殺したこと

を物語っている。

かくして事件発生後、約一年十ヵ月後に、まさに悲劇的な形でこの事件は結末をむかえたのである。

三

先述のように、この事件は天保十四年七月二十二日に惹起したのであるが、しかし、『穢多驅騷動記』の筆者は事件の起る前提条件として穢多による岩殿山千手観音への天水鉢奉納一件をあげている。すなわち、事件の前年、天保十三年壬寅三月、武蔵国村々の穢多が「仲間一統心を合せ」て同国比企郡岩殿山千手観世音の宝前の左右に天水鉢を奉納し、その折に講中を組織している穢多たちが団結を申合わせたことが、この事件の間接の原因になっているというのである。この事実を『穢多驅騷動記』の筆者はその序で「宝前の天水鉢に姓名を記する事、末代までの穢れ故に、当災難を引請しと、是則観世音の御咎め疑ひなし」といい、事件の悲劇的結末を観世音の罰と断じている。この筆者の偏見はともかく、事件の発生を岩殿山における穢多たちの団結と連結したのは意味がある。かかる穢多の連帯意識があったればこそ、権力は七、八百人の人夫を動員し、百挺の鉄炮を準備しなければならなかったのである。その連帯性は講中という宗教的な形態をとっているがその背景には交通労働者としての、あるいは養蚕業を媒介としてプロレタリア化する穢多の連帯性があったのではないかと思う。この点は今後の研究に待ちたい。

またともに重追放の判決を受けた長吉、貞右衛門の言葉のなかに、彼らの考えが部分的に表現されていて興味深い。すなわち、長吉は「此騷動は江戸始ッテ初メてとあれば、是日本一之騷動也、其騷動ニ発頭人と目立られし處ハ、千両道具我共冥加に叶し處也、壹ケ度死ねハ二度とハ不死、一命を捨る時ハ本望也」といい、貞右衛門は「下司下屬之身分なれとも、こっちにも荒神様があり、我々蟻のおもひも天に昇る、此恨みいつかはらさで置べきか」といったという。これらの言葉は二人の背後にこれを支えている多くの穢多がいなければ吐けない言葉であり、「此恨み」は個人的なものではなく穢多全体のものである。しかし、七月二十二日発生以来八月十一日まで二十日間、彈圧されたこの騷動には、権力の壁の厚さもさることながら、浅草彈左衛門を頼らなければならず、これを拒否されて自衛に立上り、おしひしがれていった彼らの団結には、百姓一揆一般の弱さがひそんでいるように思う。明確な団結と闘争の原理がすくなくとも四点の史料からは窺えない。

以上、簡単に史料の解説を行なったが、そのほか、穢多と農民・商人との矛盾のあり方、権力の分裂支配の実体、浅草彈左衛門の本事件に占める位置、穢多の連帯性と背景の社会的経済的条件、この騷動と百姓一揆・うちこわしとの質的差異等々、この史料で検討さるべき余地が残されている。これらの問題点の追求を通じて、この史料が未解放部落史研究に資すれば幸いである。

凡 例

- 一、変体仮名はすべて平仮名に改めた。
- 一、漢字はできるだけ異字・俗字等原形のままとした。
- 一、文書が虫損で解読不能のものは、□をもって示した。
- 一、「()」は大徳子龍氏の緑墨と朱墨の校合記入であることを示す。
- 一、くは抹消を示す。
- 一、改頁は「」で示し、頁数は算用数字を附した。

穢多駭騷動記 全

〔騷動記〕 序

針程の事棒程に發し、説程のもの成程と思ふと、穢多の奉納、是宝前を穢シ、其天爵を蒙り、かゝる騷運を起し、一命を失ふハ己が身の莫きを知らず、貴家より沽出したる籬も、一度穢多の手にかゝらは、其皮穢で民家之掃溜に捨るなり、況哉宝前の天水鉢に姓名を記し事、末代までの穢れ故に、当災難を引請しわ是則観世」音の御咎め疑ひなし、因茲見る事、聞く音を書集め、木に竹を接て十四巻に綴りぬ、

甲辰のとし

はやしのかねに述

〔極西堂記〕

2

穢多駭騷動記

岩殿山に天水鉢奉納致事

附穢多仲間議定取究之事

諸も雖佛神之祈禱導ト、放而物を不言いわされば逆、不浄を行ふ時は忽ち難苦難病種々様々之災難事なり、仮にも穢れ不浄ハ可慎事也、坂東十番武藏国比企郡岩殿山千手観世音は実に難有尊像、諸人の知る處、因茲当国村々の穢多共悉く増長して、仲間一統心を合セ」天水桶の形鑄にこと寄セ、宝前左右に建立致し、天保十三年壬寅三月吉日を撰し、右之講中不殘出會いたし、先奉納之儀首尾克相済、目出度杯と酒宴を催し、何れも酒

興之上なれハ、謡を揚げ拍手を打て後、長瀬村貞右衛門申けるハ、此度之奉納ニ付、村々仲間中ケ様に相寄事なし、爰にて巷ツ議定致事なり、此上如何やうむつかしき義出来致ス共、一連可致旨申けれハ、女影村辰五郎申けるハ、成程此仲間于今入用に割合い得は、何程」掛り致共聊之事也、（能）左程多分懸る騒動も有間敷なそと人々助言申ける、兎角威勢の克きもの言ニ随ひ、皆一同承知之上、此外之村々仲間折節を以、一連可致旨為申聞連印可致、若否哉申村者、相除くへき旨、拾ハケ村之穢多共集り、議定取極シ社騒動之程時なり、既に其日も西山に傾きけるにや、茶屋くゝの雑用拂ひいたし、夫々に暇乞して立歸りける、

第貳卷

岩殿山觀世音へ通夜致事

附老翁物教へいたす事

（能共）

偕此奉納ハ為善与非善、境内之穢れ千代曆る清淨する事なし、其天爵觀世音の御咎め後にそおもひしらせける、

うち詰の道さへ除く穢多なれば

土地のけがれは深き奉納

と月浪氏の詠しける、去ル程に七月九日石坂村之穢多ども二人、岩殿山觀世音に通夜致シ」けるに不思議なる哉、其夜八ツ半、少く間眠みしに、夢とも現ともなく白髪のお翁老人頭れ被申けるハ、其方共奉納仲間為善非善宝前を穢し、因茲仲間一統

—5

災難事出来致スなり、予ハ當山觀世音の使なり、諸方もの共へ見せしめに、尊像をあたうる處なりと被申、其身ハかき消、如元立去りける、斯而兩人目を覺シ、他言を禁て、翌十日の朝又々尊像に拝禮いたし帰り道にて、兩人右之趣かたり合しに、何れ同断なる故、扱はと點頭、先爰にて一ふく可致与途中にて暫く休ちひしが、此兩人日々何事有哉、何事來るかと朝夕おもわぬ事ぞなかりける。依之村中相談之上、於岩殿山護摩を焚、七日の日參替りくゝいたしける、兼て二人のものともハ災難の來ル事を知て、七日の日參終て余り難有御告なりと、又も老翁來臨したまふ哉と、右の兩人申合せて岩殿山御堂ニ通夜いたし、何卒此度之災難を遁したまへと」一心に伏拝シ、今哉老翁來臨したもふ哉と眼もやらず、暑をいとへ蛟を凌ぎ、夜は深更に及べ共、老翁未タ不來、尤内陣にて足音致事度々有、良有て老翁とおぼしきもの來り申けるハ、其方共再應通夜いたし無事を祈る、依之其難を遁すなり、予ハ當山不動明王也と申て消失ける、是信心の徳を得たりしと也、

第三卷

寶前をけがす天水鉢ゆへに

不遁。

當災難のきたるとぞしれ

長瀬村辰五郎騒動を起す事

附八州御取締に御願申上る事

爰に巷ツの騷動有、其濫觴を尋るに、天保十四年癸卯年也、江戸淺草彈左衛門支配内武刃入間郡長瀬村辰五郎、当七月廿二日七ツ時ニ同州同郡越生今市町に下駄の緒を持参いたし、沽残り十八是有之い處、日野屋喜兵衛方に立寄、¹⁰右之鼻緒商ひ申度由言ければ、喜兵衛方ニ而は買取不申の故、外之市人直段に相掛りし處、直段格別異隔いたし、右辰五郎惡口雜言を申ける故、喜兵衛方ニ而拾置難く、引出し村番非人方に申付ケ送り遣しし處、辰五郎村方へ立戻り、仲間相談致し、其夜九ツ時に至り大勢罷越、外より戸を打ち、惡口雜言を申立戻り、翌廿三日四ツ時辰五郎先立ニ而萬藏・茂吉・六之丞外巷人、右一条ニ付四人連來り、喜兵衛方へ押込、以之外暴れ狼藉之狀、因茲テ¹¹上野村平左衛門立入異見いたし、村方番非人小屋迄被引取、其段喜兵衛より願出いニ付、非人ヲ以長瀬村穢多呼出しし處、萬吉・林藏兩人罷越、当役ニ而取調い所、穢多共越度無之、却而喜兵衛方ニ越度有之趣にて一同召連レ引取申い、右ニ付難捨置、追々願出いニ付、組合村々惣代に廻文を以申達シ、廿三日夕方々着之上相談に相成い得共、評儀區々にて漸々一聞いたし、願人喜兵衛・村役人又作・大惣代上野村音次郎、右之三人廿九日出立いたし、内藤新宿¹²御廻村先に向き止宿いたしし處、御廻村無之ニ付無據淺草堀田原富田錠之助様御宅に罷越願上い處、御取上ニ相成、小川町源次郎・龜吉兩人に召捕被仰付、御狀御渡に相成、八月二日御評定所に罷出、其屋江戸表御出立にて、上州太田宿より段々南筋御廻村之趣被仰聞、三人

之者帰村いたし申い、最組合村々集會之節、黒山村出入之穢多巷人、龍ヶ谷村出入之穢多長瀬村小頭与兵衛兩人方に、黒山村名主隆助・龍ヶ谷村名主理¹³蔵兩人より長瀬村要右衛門方に書面を以テ申遣い所、右兩人早々召連要右衛門一同罷出いニ付、於法恩寺ニ内々利解為聞申い得共、一向取用ひ不申、無拠其儘差置、然ル處、一件相分りい迄は糺多ども一統市場出入差止い旨、長瀬村地方役人に相断い處、穢多共申いは、当人共儀は勿論村方一同差止い義、何共難心得旨申ニ付、八月四日御取締富田錠之助様之御手先小川町源次郎弟勘次郎・専吉兩人罷越、御談合之上、毛呂本郷に罷越、當役八郎右衛門方に着、長瀬村¹⁴穢多辰五郎外三人之者共可罷出處ニ、六之丞巷人罷出いニ付、其場にて召捕、今市町迄御引取之上、縄取二人、勘二郎殿三人ニ而小川町に引連、同日夜に入、右専吉・如意村弁之助、今市人足三拾人差出シ、長瀬村穢多茂吉宅罷越相尋い所、右三人之者共老人も相見に不申、其中に当人萬藏伴直蔵巷人相見に、召捕に相成取調之内、穢多共大勢取巻老人も其場を出シ不申、茂吉宅に捕子ニ相成いを、是全穢多共之心得違故にてかゝる騷動とは¹⁵なりける。

第四卷

越生町廿九人之者捕子に致事

附長瀬村之穢多彈左衛門に訴出事

贖役と侮る上八人足も

とりこに成てこまる銘々

長四郎内	治郎吉	伝左衛門召仕	民
法恩寺店	藤四郎	利右衛門店	長吉蔵
宇之助召仕	佐平次		新蔵 ¹⁶
利右衛門悴	磯五郎	佐右衛門店	周助
市左衛門	作兵衛		勘兵衛
彦右衛門	喜右衛門		惣兵衛
伊之助召仕	市太郎	千代松店	新次郎
	久兵衛		和十郎
	安五郎	久左衛門悴	角蔵
	甚左衛門	奎右衛門悴	長蔵
上野村	定右衛門	上野村	与市 ¹⁷
如意村	弁之助	弁之助召仕	政五郎
小川村	專吉	式拾九人	友五郎

追々穢多共相集り、六拾人余取巻、木太刀・六尺棒其外竹槍等を構ひ、依之人足之内八人逃去、残り人数は一同取まかれ、尤穢多方にて右之者廣役与心得い而、此者ハ今市者共裁申、萬吉・豊吉・奇次郎・林蔵、右四人頭取といなし、六十人余之もの共一同にて今市村之者共皆殺¹⁸可致与申、人足之内藤次郎に手初め(に)打掛りい處へ逃人足立戻り、弁之助其場に立入御用ニ付神妙(に)可致旨嚴重に申渡シける、因茲手出差扣、此奴

等は皆殺可致坏と頭取(の)ものども申ける、依之廿九人之者悉く困窮ニおよびい處、同月五日萬吉・豊吉・奇次郎・林蔵、右四人江戸表に出府いたし彈左衛門方に願書認メ申上い、其文言に曰、

一武刃人間郡長瀬村萬吉外三人之者、一同奉¹⁹申上い儀は村方幸七不如意ニ付行立不申、依之親類共仲間之者申合、相續講可仕旨相頼申い處、一同承知之上、當八月四日相續講取立會合仕い所、同刃同郡越生今市村之者ども廿九人名前は不存い得共、右會合之場所幸七方に押込、會合之金子八両貳分奪取い處、外より戸ヲ立切、右廿九人之者捕置い付、乍恐此段御届申上たてまつりい、何卒以御慈悲ヲ右之始末宜敷よ御取計被下い様、偏ニ御願奉申上い、已上、²⁰

八月 日

願人 萬吉
同 豊吉
差添人 奇次郎
同 林蔵

御役人中様

斯而四人之者共は、右之趣彈左衛門役所に罷出願之趣申上けれハ、彈左衛門より被仰いは、其方共²¹願之趣不屈也、右一条越生町役人方に相届ケい哉と御尋子有之い得は、萬吉申上けるハ、御意ニ御座いへ共、御役所様御下知頂戴之上令存知、未越

生町に相届ケ不申の言上いたしけれハ、則彈左衛門手代小鹿野郡右衛門申けるハ、此度之願相手方ハ御百姓なり、一旦越生町に届ケ、其上役人方之下知に可任處也、御百姓方太勢徒黨いたし穢の金子見掛け可参いわれなし、此儀分明也、定而其方共不法之筋有之べし、此方ハ御百姓方へ手入致す²²、事作法にならず、相手方を等閑、上を輕め出訴致ス段不届ニ付、願人不殘牢舍申付る者也、高聲に被仰渡、誠に霍の屯声皆平伏致縄付人牢いたしける、

第五卷

騷動ニ付穢多仲間に通達致ス事

附捕子之者不殘帰村致ス事

斯とは不知、八月五日右之始末諸方之穢多²³、仲間石坂村友右衛門方に使者を以、右之趣通達為聞申けれハ、友右衛門申けるハ、御両所御出之處御太儀千萬なり、然る所此度之騷動義風間に承りい處格別法外也、勿論、前々一連之議定ハいたし得共、私拘中ニ落さる時は一味仕ひ事延引なり、尤見舞等ニは可参い得共、右之趣、帰村の砌り御咄シ被下い得と使者に申渡シ返し(ける)、

一心にいのる誓の印シには
來る災難を通したまふて

観音

—24—

夫より元宿・引野・松山・大里郡和田村・埼玉郡町谷村・足立郡伊谷名村・同郡名戸村不殘通達ニおよびい得は、日外岩殿出

會之砌り議定致せしむなり、今此時を得たりと夫々支度いたし、諸方より馳付、中に剛悪和田の長蔵、当年六十五歳にして、此事承り我營番と手下引連れ、其身ハ馬乗致し、飛道具・竹鎗・木大刀を為持、長瀬村に馳付様子窺に彼是致す内、穢多共うちこぞり五百人余り相集り、先村内之出入(之)往還を²⁵防くへしと鎗・銃炮を構ひ、八刃役人生捕たりと高聲に呼わたり、是天下之御用人に敵對は基タ強法の始末故、廿九人之もの悉く困窮致し、此上彼等放火可致とも難計、其上ハ廿九人にて鯨波を揚べくと相談致せし事なり、如何にも心細き次第なり、又い股引・脚伴にて壹尺八寸の脇差ヲ帶シる者五六人來り、此組之穢多(共貳拾)四五人川越組ト見えたり、それに引続きて北廣谷穢多三箇村ニ而貳百四人手道具番付二百四番迄有之由²⁶馬に附送りしと也、因茲、御取締富田錠之助様熊ヶ谷辺御廻村之由、村方平左衛門・佐右衛門兩人五日之朝出立いたし、又儀兵衛・上野久八追々御注進ニ罷出い得は、翌六日ニ上州太田宿御出立にて同日戌之刻に越生町に御着被遊、長瀬村穢多小頭並重立者御呼出い處、小頭九右衛門・長吉・林七罷出い處一々御札御吟味之上、捕子之者可差出旨被仰渡い得は、林七申上いハ、御意ニは御座い得共、此度村方幸七不如意ニ付相續請仕い處ニ、當宿間御性名ハ不存²⁷い得共、廿九人罷越、右幸七小家故隣家茂吉宅を借り會合仕金子八両貳分相集メ置い所、右廿九人之者押入奪取申い、此義如何御札被下い哉、御下知に依テ右之人数可差出哉、我等老人にてハ難取計仲間相談之上差出

シ可申と言上致シける、依之錠之助様（被仰けるハ）其方共之申通り此方之耳にも入レる有、廿九人之者共呼出シ逸く（一と）吟味いたし、其方共と一連並置拷問可致旨、其方仲間にて弁舌相分りぬ者四五人召出し掛合之上、右之金子調達為致、其上書付等²⁸可為致旨、此趣仲間相談を早速可申達と被仰渡、忝ト先帰村被仰付、同七日又々御呼出シ被成御了解之上承知伏仕困（を聞）き旨、同人共御請申上ニ付、今市村・上野村・如意村役人共長瀬村に罷越引取可申旨被仰渡ぬニ、今市村市郎兵衛上野村役人・如意村役人其外越生（町）・毛呂本郷両村之寄場大小惣代之立會、本村迄引取ぬ處、近村より人数差出しぬは凡千人余も罷出引取相成ぬ、先是にて家内之者も一同安堵いたしぬける、²⁹

第六卷

富田錠之助様御呼出（御吟味）之事

皆も富田氏之智謀にて廿九人之命を救ふ計略なり、人々是に恐れけり、然上者富田様にも皆々帰村為致ぬ得は、忝ト先安堵被遊ける、同八日園部弾次郎様内藤新宿を御出立にて、中野田無村始飯能高鹿辺（迄）御道筋數ヶ所（村）百石ニ付人足五人宛御手當ニ、御着凡人數千人余御召連長瀬³⁰辺迄御越被遊、同村役人より捕子之者引取ニ相成ル趣申上ぬニ、人足一同村方に止宿被仰付置ぬて、富田氏に對面之上内談いたし、同十日早朝に長瀬村穢多共十五才より六十歳迄不殘可罷出旨被 仰渡ぬ處、

林七其外三人越生町會所に罷出着届ケ申上げければ、富田様被仰けるハ、今日之召狀之義は十五才より六十才迄之者不殘罷出ぬ趣ニ申遣シぬ所に、出方共計りにて罷出ぬ哉と御尋有之ぬ得は、林七申あげぬは、昨日御引合之由我々ども³¹四人御届ケ申上ぬと申上げれば、富田氏被申けるは、昨日一条之者共哉暫く控へ有べしとて又ハ彈次郎殿と内談いたし、双方御呼出しにて穢多ども名前一々御書留被成ぬ而、廿九人之内四人宛可罷出旨被仰付、素人四人・穢多とも四人林七・三郎・与兵衛・九右衛門、尤穢多ともハ跡に並び平伏いたし恐れける、時ニ錠之助様被仰ぬは、當町廿九人捕子之者、其方共義去ル四日之夜大勢徒黨いたし、長瀬村幸七宅に押込相續講之金子八両貳分奪取ぬ趣³²彼等申ニ付不屈之始末有駄ニ可申上ぬと左も権柄に御呵リ有、町内之もの乍恐奉申上ぬ、私ども大勢長瀬村に罷越ぬ趣有駄に奉申上、去ル七月廿三日長瀬村之もの共四人連ニ而當所喜兵衛宅に押上り見世前之商ひもの投ちらし悉く暴れ罷歸りぬニ付、右之趣長瀬村役人被相届ケ置ぬて、御出役旁御願御相談之上、右之者共四人者共搦捕可申積り、纔之金子を見掛け越生町之名目を穢し可參儀無御座ぬ、此段³³御察し被下、爰に罷居ぬ者共如何よふ申上ぬ共毛頭相違無御座ぬと言上いたしけれハ、富田様被仰ぬは、長瀬村之もの共町内（の）ものハ今其方共へ（も）聞通り、纔之金子を見掛け參謂れ無御座ぬと申ける、此時四人のものども一言之儀不申ぬニ付、町内之もの御赦免にて又は町内四人御呼出有之、其方共義去ル四日長瀬村幸七方に罷

越、相續講之金子八両貳分奪取趣彼等申ニ付、不届之始末有
 跡に可申上と被仰けれハ、四人之もの共口を³⁴揃て申上は、
 乍恐言上奉申上は、去ル七月廿三日長瀬村之者ども當所喜兵衛
 宅に押上り悉く暴れ狼籍仕はニ付、右之趣長瀬村役人に相届置
 ゐ而、御出役人旁御願御相談之上、右四人之もの共搦捕可申積
 り、中々以金子之儀なと存知不寄、御吟味を奉恐入は、右一条
 之義者、何程之御吟味を請ひ共聊相違無御座いと申あげけれ
 ば、是にて事相分り皆々赦免にて立去ける、其後穢多どもに申
 けるハ、其方共儀何様心得は哉、一言之儀不申段者³⁵不心得、
 其方共義偽りこれあるよし不届ニ付、上意を以テ繩に懸るもの
 やと立もあいなき次第なり、

第七卷

長瀬村穢(多)ども飯米ニこまる事

園部弾次郎様村々穢多騷致事

扱此騷動ニ付、十里四方之穢多仲間徒黨之人數凡六百人余、食
 事は五軒之穢多より焚出し³⁶「壹飯ニ付白米三俵余を申故に

一飯に三俵つゝの焚出しで

「荒も」
 大汗長瀬むらの穢多ども

若斯にて長瀬村の米穀早速喰込、因茲近辺之穀問屋にて買取可
 申と銘々馬乗出し沽出しは得共、何方の間屋ニ而も、右騷動之
 飯米を知る故沽出し不申は故、飯米に追れ無拠皆ちりくゝに帰
 りける、扱林七三郎・与兵衛・九右衛門義者、於會所に御召捕

に相成、又々御手當ニ而村方上野³⁷如意村・黒岩村其外近村に
 百石ニ付人足十人之差紙にて、御手先一同捕手之者曝の襷を掛
 け、鉢巻老手の支度御免にて、長瀬村穢多共は路込、十九人召
 捕、同十一日未明より御大將園部弾次郎様騎馬ニ而、村方組合
 村々より人足三百人余鎗炮三十四挺、其外手道具にて御召連、
 厚川村に罷越え處、道之傍二年の頃四十計りの草苅獨、穢多
 之事露知らず、此跡を見て既に迷むとする故、人足のもの³⁸聲
 を掛け、其元義者厚川村之者成哉と咎めけるに、彼男申は者、
 私ハ大塚村之百姓也と申ける故、其儘に

穢多騷に出て艸刈を咎れば

とがなき故にかまはざりけり

斯讀侍りて、厚川村之穢多ども御召捕、夫より女影村に趣之^(赴)
 處、男ども見へざるなし、

女影もおとこのかげも見へざれば

戸棚を明けてさがすおかしさ

—³⁹

隠れ居留る穢多共御召捕、それより人足之者へらし「村々にて
 加勢を殖し」、入間川村・中野・今井・藤橋村々之穢多共御召
 捕被遊い而、扇町屋ニ御止宿にて、翌日人足一同越生町御旅宿
 に御引取ニ相成、翌十三日富田様上辺に急用出来いたし御出
 立被遊い、同九ツ時頃御取締高橋三藏様御着にて、追々御調に
 相成、同日夕方囚人別之村方に御預ケニ相成申は、同十四
 日川越御領分之穢多共不殘御當ニ而、御目付貳人同心差添、囚
 人拾人御引立ニ而御取締に⁴⁰差出ニ被成は、又候高橋三藏様

料 仰渡有之、石井村寄場ニ而人足ヲ差出し、高坂・引野・松山辺
 資 ・石波戸村之穢多共追々召捕へ越生町に相送り申い、其外御
 召捕ニ相成い村々左之通、

第八卷

村々囚人人数書之事
 村々人足人数書之事

長瀬村	四拾六人 ⁴¹
同江戸ニ而	四(五)人
女影村	貳拾三(貳)人
鹿山村 ^{〔二本木〕}	六人
中野村	十四人
藤橋村	五人
今井村	壹人
厚井村	十四人
和名村	廿四人
入間川村	二(七)人 ⁴²
高坂村	廿三人
片柳村 ^{〔十三日十五日迄〕}	五人
小前田村	三人
石坂村	壹人

只ひとり浮世の義理にしばらくれて
 苦勞もあらぬ重郎の穢多

十三ヶ村ノ百七十七人

石波戸村

和田村

松山村

柏原村

小坂村

小堤村

廣谷村

安生老村

引野村

野田村

十箇村ノ七拾五人

廿三ヶ村ノ貳百五十貳人

ぞんざいが過ておかみへ御苦勞を
 なわまで掛る御出役人

右川越御領分御召捕の分、御取締に御引渡ニ相成、又々十五日
 江戸表御出立にて、中山誠一郎・大熊左助様中富村に御意之
 趣、内藤新宿之御役人より御先觸着、同日同所御出立、入間川
 高萩宿⁴⁵より當番迄御継立に相成申い、同日九ツ時に御着被遊
 い、村々御手当人足日々越生町に相詰候人数左之通り、

一人足三十人	鑓炮五挺	上野村
一人足十人		黒岩村
一人足二十人	同 貳挺	成瀬村

壹人 ⁴⁴	五人	十壹人	十壹人	七人	八人	貳人	四七人	十四人 ⁴³	十四人 ⁴³
------------------	----	-----	-----	----	----	----	-----	-------------------	-------------------

人足拾人	同 三挺	津久根村	人足廿人	同 四挺	大橋村
人足貳十人		鹿下村	人足廿人	同 貳挺	田中村
人足二十人		和田村 ⁴⁶	人足十貳人		奥田村
人足廿人	同 二挺	古池村	人足廿人		大豆戸村
人足四十人	同 壹挺	大谷村	人足拾人		西戸村
人足廿人	同 三挺	小杉村	人足十人		小用村
人足廿人	同 二挺	如意村	人足十四人	同 二挺	桃木村 ⁴⁹
人足四十人	同 四挺	熊井村	人足十六人		瀬戸村
人足三十人	同 三挺	泉井村	人足七人		箕和田村
人足	同 七挺	龍ヶ谷村	人足五人		高之倉村
人足三十人	同 五挺	大間村 ⁴⁷	人足十五人		毛呂本郷
人足廿人	同 十一挺	黒山村 ⁴⁷	人足十人		前久保村
人足廿人	鉄炮四挺	上谷村	人足五人		堀込村
人足三十五人	同 五挺	大月村	人足八人		馬場村
人足十七人		堂山村	人足七人		小田谷村
人足十人	同 五挺	麦原村	人足六人	鉄炮二挺	平山村 ⁵⁰
人足廿人	同 二挺	須井村 ⁴⁵	人足十五人	鉄炮二挺	葛貫村
人足十人	同 三挺	番匠村	人足九人	同 六挺	大谷木村
人足八人		今宿村	人足八人	同 六挺	阿諏訪村
人足拾人		赤沼村	人足十二人		滝之入村
人足十五人	同 壹挺	馬場村 ⁴⁸	人足二人	同 壹挺	宿谷村
人足十壹人	鉄炮壹挺	関堀村	人足三人	同 四挺	権現堂村
人足廿人	同 三挺	竹井村	人足十人		下河原村

一人足十人	市場村
一人足十人	大類村 ⁵¹
一人足二十人	川角村
一人足八人	大久保村
一人足二人	欠之上村
一人足六人	成願寺村
一人足五人	若林村
二人足三十人	泉井村
村数ノ五拾六箇村	鉄炮三挺

〔鉄炮ノ百壹挺〕

弁當を以の外の小遣ひが

十日壹分にあたる人足

右之通り組合其外村々旁今市町へ詰切、宿⁵²所を定、目印の幟りを立、提燈に村名ヲ印、鉄炮數挺は右に印、其外竹鎗等持運ひ、用意嚴敷、村々人足番追々相當り、是より中山誠一郎様・大熊左助様御兩人にて替り々御吟味也、尤穢多共の食事町内にて持運ひ、銘々相渡し、後々は穢多共、本村之者共より食事為致ける、又候御同役駒崎静助様内藤新宿にて、追々御吟味之上、御赦免ニ相成ひ者共、夫々御引渡に相成り、十八日同断にて村々始末書差出し、翌十九日ニも同断、夫々御赦免⁵³相成ひ者共之、御差出しに相成ひ分者、穢多共本村へ縄駕籠被仰付候、同廿日、同断廿一日明七ツ時御出立〔被成〕⁵⁴而、中山誠一郎様江戸表迄御越被遊、穢多四人御差出並村預けに相成

い、村所名前左之通、

長瀬村	貞右衛門	下広谷村	專助
新治郎	磯五郎	太吉	
菊二郎	貞五郎	金五郎 ⁵⁴	
貞次郎	勇次郎	岩藏	
貞七郎	忠七	八五郎	
文八	九右衛門	龜五郎	
常吉	貝藏	六人	
喜十郎	音五郎	下鹿山村	太七
文太郎	勇太郎	民藏	
忠藏	重五郎	栄次郎	
六之丞	六之丞	安右衛門	
專之助	專之助	四人 ⁵⁵	
		野田村	八百吉
		松山村	丑五郎
			喜三郎
			源左衛門
			長藏
			半三郎

穢多驅騷動記(仲村)

留五郎ヲ加
ヘテ猶四十
人者也

庫吉 駒二郎 三郎 由右衛門 寅松 重助 (八五郎) 富士太郎 辰五郎 榮次郎 音八 六助 長吉 幸七 重次郎 幸七郎 直藏 彦助 幸次郎 喜四郎 法昌 四十人 外二四人は江戸ニ而

小坂村

清藏 利右衛門 七人 松右衛門 權次郎 勘左衛門 清吉 太吉 紋次郎 勝右衛門 七人 權四郎 清吉 安太郎 喜之助 清藏 鍊五郎 源右衛門 五十八 豐吉 八人

小堤村

安生老村

治之助 藤吉 十左衛門 万太郎 清吉 源五郎 清次郎 治右衛門 富之助 幸右衛門 十人

女影村

三次郎 德五郎 熊藏 七五郎 清八 喜八 辰次郎 七人

石波戸村

文吉 亀吉 岩五郎

和田村

長藏 市兵衛 權藏 五十九

本宿村

滝藏 初五郎 八百吉 秀吉 万吉 茂吉 六人

惣九十六人、山駕籠三十六棹長瀬村、同十棹安生老村、同八棹小坂村、同七棹松山宿、同七棹小堤村、同六棹廣谷村、同六棹女影村、同六棹本宿村、同四棹下鹿山村、同三棹石波戸村、

—60

同三棹和田村、同壹棹野田村、目駕籠三棹、右之人數科之經重
ニ不限、不殘駕⁶¹籠にて〔村々へ〕先觸いたし、八月廿四日未
明より村々人足袴棹ニ付四人掛りに而弁當持四十人余、其外役
人附人凡七百人警固いたし、鹿之下村・馬場村・番匠村・大倉
村・庚子・松山屋食にて相渡し、それより鴻巣⁶²は、次桶川宿
へ、宿々ハ悉混雜いたし、其節南部之長左衛門と申者私用あ
つて、年頃三十五、六之男貳人供に連れ、江戸表へ罷越、帰国
之砌り、中仙道上尾宿友兵衛・清兵衛宅に駕に乗り來り止宿い
たし、翌廿五日朝、右之囚人并人足七百人余^{〔百餘余〕}、道法り寺里半
ばかり相續き前代未聞事共なり、彼の長左衛門是を見て其は天
和八年辛酉八月五日生れて、當年百六十三才ニ成りしが、是程
の大騒動は覺へなしと被申ける、〔此長左衛門ハ〕家内五夫婦
といえり、當家ニおゐてハ下女下男にいたる迄死たる者なしと
物語りいたしける、爰にて人足を次替大官驛に送り、同廿五日
浦和宿屋食にて、夫より蕨驛にて人足指替、戸田之涉しにて暫
く手間取、高七ツ時板橋に止宿いたし、翌廿六日早朝に江戸表
にぞ送りける。』⁶³

第八卷
大尾

第九卷

L-64

跡部能登守様御調之事

長瀬村辰五郎・越生町喜兵衛兩人御糺之事

同日四ツ時^(七) 御勘定奉行跡部能登守様 御腰掛差着致し、御届
ケ申上^レ得共、同日七ツ半時御白洲に御呼込に相成、村々四人
九拾六人御白洲へ相詰メ^レ處、則御前之御調ニ御座候、最長瀬
村辰五郎・長吉・貞右衛門口書御引合^(六) 御尋有之^レは、最長瀬
辰五郎とハ其方か、去七月廿二日越生町喜兵衛方に罷越不法ニ
および候趣御尋ニ御座^レは、辰五郎申上^レは、私儀其節下踏之緒
持参仕^レ處ニ、直段格別異隔いたし^レニ付、沽買不仕^レ得は、
右喜兵衛私に打懸^レ候處、大勢相集り宿外に迄引去し打擲被致
^(八)ニ付、残念ヲこらへ村方に立戻り、右之一条長吉・貞右衛門
其外のものへ為聞申^レ得は、此段拾置かたくト申、翌廿三日越
生今市町喜兵衛方に貳^(九)、三人ニテ右之一条相札可申と存知推
参仕^レと申上^レける、因茲越生町喜兵衛方に御尋ね有之、喜兵衛
申上^レは、去ル七月廿二日長瀬村辰五郎下踏之緒持参いたし商
ひ申度由申ニ付、澤山仕入置^レれ間、宜敷旨申ければ、滝之入
村仲右衛門と申者其場ニ居合、右下駄之緒直段ニ相掛^レり處、
辰五郎儀仲右衛門に向ひ格別法外申ニ付聞捨がたく、宿外迄
連出し、村番非人ニ申付為引取申^レ、中々以打擲致シ^レ覺^レに無
御座^レは、又候^(一〇) 其夜私宅に大勢引連^外より戸ヲ打^レき惡口雜言を
申立^前帰^レり、又々廿三日辰五郎外四人連立士足見世先へ押上^レり、
商ひ物投ちらかし惡口雜言を申故弁置かたく、無拠組合村々物

代相談之上、八州御取締御役人様に御願申上ひ得は、斯之始末ニ御座いと申上けれハ、此一条相済いて喜兵衛義ハ御白洲に御下ケニ相成ひ、尤長吉・貞右衛門其外之囚人迹に残り、辰五郎儀は御調へ相済、一先腰掛迄御下ケに相成ひ得は、中間相談之上差添人又七殿⁶⁶・相頼、辰五郎召連浅草新丁上総屋治右衛門方に参申ひは、私儀は入間郡長瀬村ニ御座ひ、此度村方騒動ニ付囚人百人計り御當地に被送、今日着届ケ仕ひ所、御奉行所様御調之上、私等人御糺之相済ひニ付差添人御方御頼ミ申、御腰掛よりかけ抜ひ而御頼申上ひ、迹組之儀は幾人参りひ哉睨ト相知れ不申ひ得共、渡程可参ひ間御世話ながら御宿御頼ミ申上ひト言入けれバ、主人治右衛門被申けるは、先達而より長瀬村之御方五人私方ニ御止宿被⁶⁹成ひと言けれハ、最初彈左衛門方訴出万吉・豊吉・奇次郎・林蔵・清蔵也、右之者共彈左衛門方ニ而追々御吟味之上、宿預ケに相成ひ間、當家ニ罷居ひ得は、辰五郎面談いたし右之趣為申聞、互ニこぶしを振り詰、夫より一連致しける、兼テ辰五郎役所ノ事モ心⁷⁰元なく宿治右衛門と内談いたしひ得は、右五人之者共ニも案事ければ、治右衛門下代小八ニ申付道案内とて提灯を為持、右辰五郎差添人同道いたし御腰掛ニ控シ處、御糺シ取中故暫相休ひ得は、幸ひ⁷⁰御白洲にて宿御呼出シ被成ひ間、宿屋之儀は何方成るぞと御尋ねニ付、小八申上ひ、宿之儀は新町上総屋次右衛門ニ御座候と申上ければ、則御奉行所様御申渡シ有之、此度之囚人二十四人其方⁷¹可預旨被仰渡、下代小八御請承知奉畏、則預り證文差上ひ而御腰掛にひ

かひける、

第十卷

〔序文に始終九卷に断延るニ及んで、其終を知らんと星霜を送りて天保十五年申辰四月御調委しく尋けるに〕去レハ辰五郎御調之後ニ長吉・貞右衛門、其外九右衛門・六之丞・三郎口書御引合御利解御糺被遊ひ得は、其方共⁷¹儀は越生今市村之者今共九人捕子ニ致シ置、村方幸七不如意ニ付相續講いたし金子八両貳分相集メ置ひ所⁷²、右二十九人之者押入、右之金子奪取ひ越八州調之上ニ而此方に相聞に、廿九人之者右之金子奪取ひ哉と御糺有之ひ得は、貞右衛門申上けるハ、其儀一向存シ不申と申上ケル、幸七不如意ニ付相續講いたしたるを我等ども不存と言事なしと御阿り有、其砌り捕子致シ八州之役人生捕たりと高聲に呼ハリシ者あり、其方共成か⁷³と御尋有之候得は、貞右衛門其儀も存シ不申由申上けれハ、我等⁷²共ハ何事も不存と計り、我等共身分とシテ八州之手先如意村辨之助・小川村仙吉儀天下之用人也、有駄ニ可申上と被仰ければ、長吉申上ひは、只今貞右衛門申上ひ通り右様申上ひは、誰にても無之と申上ければ、則御前外三人之者ども今申通り我等共も不存と言だろ⁷⁴うな、九右衛門・六之丞・〔三郎〕ヘイ御意ニ御座いと計り一言之儀不申上、因茲御前ヨリ被仰ひは、右⁷⁵の儀相訳りひ迄は其方共不殘手鎖ニ而入牢申付る者也と直様手鎖ニテ御白洲御下ケニ相成、又同村富士太郎・文太郎⁷³・菊次郎御呼出シ有之、其方ども儀

村方ニおゐて今市村之者二十九人捕子ニ致シ、其時八州之役人生捕たりと呼わりしは我等とも成るか、能キ工夫を致し生捕たり手柄之程無此上、何と言ものなるぞと御尋有之得は、富士太郎申上は、其時申けるは、長吉ト貞右衛門と申あげける、依之口書御留被成而、右之者共御腰掛まで御下ケニ相成ひ、又々御呼出シ有之、安生老村小頭喜右衛門悴治之助罷出得は、其方も長瀬村かと御尋有之、治之助申上は、私義ハ安生老村治之助ト、申者ニ御座いと申上げれば、則 御前口書御留被遊候て、安生老村喜右衛門悴治之助其方と外二人ニテ長瀬村茂吉宅之堅メヲいたし、飛道具等琉球ニ包持参いたしし處、持戻り喜右衛門方に隠シ置ひ趣口書御糺之上ニ而も相訳り兼、右治兵衛色々申譯ノ已ニテ御前之御糺一時余り手間取、夫より順ニ詰居シ四人御調荒増相濟、女影村辰五郎・二本木村万蔵・藤橋村熊吉・安生老村竹松、右之者共一同御調之上、村々差濟人共一先御腰掛迄下り居得は、其く夜も八ツ時也、右之穢多共飯牢迄御下ケニ相成ひ、又ひ御呼出シ有之、差濟人共一同御白洲に相詰ひ處、貞右衛門・長吉・九右衛門・六之丞・三郎、此者儀ハ品川ために預ケ也、小頭与兵衛・辰五郎・茂吉・万吉、他村之者ども女影村辰次郎・二本木村万蔵・藤橋村熊吉・安生老村竹松、新丁之宿預りは長瀬村十貳人、他村五人、都合拾七人、從 御前御白洲ニ而入牢被 仰付、外廿四人手鎖宿預ケ相成、御白洲ニ村々差添人並江戸宿之者、右穢多ども御預り證文差

出シ、御白洲引取之節は其夜七ツ時なり、宿は神田須田町二丁目鷺屋新七方迄罷越、穢多共儀ハ浅草新丁上総屋治右衛門引取にける。

第拾壹卷

御屋敷下谷二丁町也

御留役増田作右衛門様御糺之事

附り安生老村竹松ヲ御吟味被成事

又候八月廿七日御呼出しにて、跡部能登守様御腰掛ニ罷出の處、入牢人・手鎖人・預人一同召出シ、御留役増田作右衛門御掛リニ而、昨夜御前之御調通り御糺御座い、其夜八ツ時御白洲引取に相成、同廿八日富士太郎・文太郎・菊二郎、右三人御呼出之處、富士太郎病氣ニ付外貳人罷出得は、作右衛門様被申候ハ、其方共儀一昨夜御前之御調之上ニテ八州之役人生捕たるハ、長吉・貞右衛門と申上げるに相違有間錦哉、文太郎申上は、御意ニ御座い、私共ハ曉と聞寛ハ無之得共、富士太郎儀、右様申上は、富士太郎儀は如何いたしたと御尋有之、菊次郎申上は、富士太郎儀は昨日病氣ニ而休居りいと申上げれば、外御尋も無之而御下ケニ相成ひ、又候新丁上総屋治右衛門方別段手鎖人御預り請書印形御取被成ひ、二本木村万蔵・藤橋村熊吉兩人書付を以奉願上は書面、御留役御披見有之、其方共々差上は願書おかしい處有之、此書面ニ白簀を立、白櫻を被ケ白暴ニテ何者とも不知、大勢ニ而押込いと有之、何方ニ而

見受⁷⁹い哉と」御尋ね御座い處、二本木村万蔵何共不申上、藤橋村熊吉に御尋ね有之、我は何所にて見受⁷⁹い哉と御尋有之、是も何共不申、程過て申上げるハ、私ハ其節は寝て罷居いと申上げれば、御留役被申けるは、我は寝て居た夢ではないか、我等兩人ハ揃て能く夢ヲ見たりと被仰、夫より御尋無之御下ケニ相成い、同廿九日富士太郎手鎖之儘出奔いたし、新丁宿屋より右之趣御訴申上い得は、五日限り御尋被仰い所、九月朔日見當り差出シ、其日は仮牢ニ被入、翌二日⁸⁰手鎖御掛替ニ而宿所に罷在い、去ル廿九日長瀬村定七・重次郎・音五郎・栄二郎・常吉・文八・勇太郎・六助、右之八人其夜九ツ時也、御白洲に御呼込ニ而、御留役より右穢多共越生おいて今市村ニ御出役様に差上い場所口書奥書御讀被爲聞い、北条雄之助様ヲ始、貳、三人御名前有之、富田錠之助様ヲ以、如意村弁之助・小川村仙吉儀、長瀬村茂吉召捕ニ罷越い處、右村万吉・林蔵任申ニて茂吉宅を相堅メ罷在いに相違御座なくい、因茲⁸¹爪印爲致いテ、村穢多不殘場所口書 奥書被爲仰聞い上にて、御留役増田作右衛門様御吟味、安生老村竹松其方儀は長瀬村に罷越、竹鎗等作⁸²りい哉と御尋有之い得は、竹松申上いハ、私儀一向不申と申上ける、其方長瀬村に参り誰か宅に止宿いたし哉、有駄ニ可申上と被仰ければ、万吉宅ニ止宿仕いと言上いたしける、然ル上は竹鎗ヲ作りいニ相違無之、竹松申けるハ、大勢ニ而持運ひい故私晝人ニ而は作り間ニ合不申、それゆへ穢多共差上⁸²候口書

ニ竹松長瀬村に参り竹鎗等作りい口書にて、又い安生老村穢多共御白洲に御呼出シニ而御尋有之、其方共儀、竹松長瀬村に参り竹鎗等作りいヲ見受い哉、相違有間敷と御尋ね御座候、右穢多共一向存知不申と言ける故、大氣に呵れ、見受いニ相違有間敷と被、其時何共不申上いニ付、御留役より右口書之通り相違無之と被仰聞い、穢多共一同相違無之由相答候、因茲從御前右口書奥書被爲仰聞い者ども壹ト先帰村被 仰付い、其夜九ツ半時鷺屋方まで⁸³罷越、宿預ケ之者共一同帰村被仰渡ける、偕日、御糾シ有之い得共筆紙尽シがたく、手鎖改等度有之い得ども爰ニ畧シテ、又九月十一日夜五ツ半時御呼出シ有之、長瀬村六之丞・茂吉、其外二本木村万蔵・藤橋村熊吉・安生老村竹松追々御呼出シ御調之上ニ而申訳相立、依之右之者共從 御前被仰渡い、我等共申口相立いニ付出牢被 仰付直様御白洲ニ而繩解御赦免に相成い、因茲御白洲にて御役人より右入牢人ノ⁸⁴預り證文持出シ、新丁上総屋下代小八・須田町二丁目鷺屋新七・長瀬村名主宗三郎・同村組頭又七方に御返事被遊ける、

京都之者

素人衆へ手向したる穢多ならば
つむりてんくしてこまそうぞ

大坂之者

檀那衆に慮外をししたる穢多共ハ
ゑらるさかえじや つみにおこなへ⁸⁵

江戸之者

穢多どものよこそつほうを打のめし
はやくはりつけばしらしよわせろ

第十二卷

和田村長蔵御札之事

〔附〕長蔵辞世として讀置事

去ル八月廿六日大里郡和田村長蔵着届ケ之砌^{〔後〕}一通り⁸⁶御調有之、又ハ九月二日御呼出ニ而上総屋下代小八和田村役人召連御白洲に罷出^{〔と〕}處、和田村長蔵儀其方ハ其砌リ長瀬村に何様有て罷越候哉御尋ね有之、長蔵申上^{〔と〕}ハ、私儀長瀬村に参り^{〔用之〕}越御尋に御座候、乍恐申上^{〔と〕}ハ、此度長瀬村之者共越生今市村と騒動ニおよび和談可為致積り長瀬村へ罷越^{〔不仕候〕}處、憤り之上ニ^{〔と〕}得ハ、一向承知無之故、一先差控申候と申上^{〔と〕}ければ、和談とハ偽り飛道具竹鎗等持参いたし^{〔と〕}ハ、如何之筋不屈之者と御呵り有之、長蔵申上^{〔と〕}ハ、全ク⁸⁷飛道具等は持参不仕^{〔と〕}と兼而宿より心掛たる一チ物之折紙懷中より取出シ、御前ニ差上^{〔と〕}得ハ、上を輕メ不屈者なりと則御白洲にて手鎖被仰付、上総屋下代小八に宿預ケニ相成^{〔申付〕}ハ、誠に地獄之沙汰も手鎖次第と思われける、無程九月八日ニ至り長蔵儀病氣ニ取付^{〔申付〕}得ハ、我ながら全快有間鋪と須田丁二丁目鷺屋方へ人を立て差添人に申遣シ^{〔置れる〕}所、早速運來り病氣之趣申為聞、壹度安堵致して讀む^{〔置れる〕}へる⁸⁸。

鳥ならば春のはやうに遊ぶ身を

夏^{〔人〕}のむしとハひとハいふらむ

辞世にあらねども、我が身をおもひ人の議を肝心して讀たる也、

〔辭世に〕ちりやすき穢の紅葉ハ霜かれて

見しにもあらぬ人々のいろと

自筆にて認メ差添人に預け^{〔置あわれな〕}衰^{〔う〕}れる⁸⁹哉、同月十四日七ツ時六拾

五歳にして草葉の露と成り^{〔と〕}ニける、此旨宿屋より御訴申上

ハ、又ハ女影村辰五郎同月十六日牢死いたし^{〔と〕}ニ付御訴申上

候、同十七日御呼出有之、御吟味御札之上村々囚人不残御赦免

有之帰村被仰付、然ル處長瀬村長吉・貞右衛門其外相残り追々

御吟味御札^{〔と〕}有之、同十八日右之両人御呼出しニ而上総屋下代

・金八両人召連差添人相添御白洲に罷出^{〔と〕}得ハ、御留役増田作

右衛門様御札^{〔と〕}而、長吉・貞右衛門共先達て御前之御調之節、

八州役人生捕たりと被申シ^{〔と〕}ハ我等兩人か、富士太郎と委敷聞

止たり、長吉申上^{〔と〕}ハ、御意ニ御座^{〔と〕}ハ、其砌廿九人茂吉宅に捕子

ニいたし贖役と相心得心外ニ取紛^{〔申付〕}レ申^{〔と〕}と申上^{〔と〕}ける、増田氏被

申けるハ、成程其方の申處^{〔と〕}尤也、乍去^{〔と〕}り八州の役人生捕たりと

被申處、其方共之越度也、仮ニも八州役人と申ては上を輕しめ

る利也、貞右衛門申上^{〔と〕}ハ、其砌リハ私共取逆上て我しらず申

ハ、咎^{〔と〕}と覺ハ無之由申上^{〔と〕}ける、因茲弥々科人相極^{〔と〕}リ、不屈之始

末騒動之根元ハ其⁹¹万貳人なり、依而口書之上爪印致^{〔と〕}へしと則兩

人之爪印取置れ、其方ともハ何ぞ佛神之御罰を受ふと只事あ

らず、箇様の騷動は江戸始^{〔初〕}てはつなり、其方共之糺ハ是迄なり
と申されければ、兩人目然^{〔目之覚め〕}瘡し如くシ而御白洲御下ケニ相成、
四人之者共ため息キいたし、途中におゐて金八申けるハ、今日
増田様の御調にハ富士太郎より委敷聞留たるともふされ、其上
其方共之糺シ是迄也と被仰い、各々方ハなんと^{〔守御〕}心得被成い
哉、此儀六ツヶ鋪被思いと言ければ、鬼神長吉言けるハ、此騷
動は江戸始ツテ初メとあれば、是日本一之騷動也、其騷動発頭
人と目立られし處ハ千両道具我共冥加に叶し處也、壹ヶ度死
ねハ二度ハ不死、一命捨る時ハ本望也と咄しける、貞右衛門申
けるハ、下司下屬之身分なれば、こつちにも荒神様があり^{〔我々〕}、蟻
のおもひも天に昇る、此恨ミいつかはらさで置べきかと、兩人
は威勢に貳人ながら挨拶に⁹⁸「込り、差添人申けるハ、貳人なが
ら能覚悟なり、今手前の咄し通りなれば何にても氣遣なしとも
ふし、差添人は途中にて別ける、貞右衛門モ廣言ハいえども心
細くなりて一首讀侍りしと也、
〔金八様一音うかんた〕
これ〔を〕見て身ハ浮るものとおもいしれ
なんのうらみかこゝにあるべき
長吉も覺悟究めて讀置しとなり、
おもひきや小塚の原に捨られて⁹⁴
犬のあらそふ身なるべしとは
〔挨拶ニ因リ〕
金八、貳人之廣言に程なく宿元^{〔挨拶ニ因リ〕}に帰りける、
右之趣増田氏より跡部能登守様に申上げる、兼て兩人之儀は御

成破^{〔敗〕}に可行と内々御評儀有之い處に、程なく兩人病氣付九月廿
八日貞右衛門病死いたしける、因茲、治右衛門方より跡部能登
守様に御届ケ申上げれハ、又ハ壬戌九月三日長吉病死ニ付追々申
上^{〔けだ〕}の趣左之通り

乍恐以書付ヲ奉申上⁹⁵い

久貝因幡守知行所

武州入間郡長瀬村穢多

小頭与兵衛組下同村貞右衛門

當九月廿八日七ツ時病死シ、又ハ壬戌九月三日朝五ツ時長吉病死
いたし⁹⁶ニ付、其段御訴奉申上⁹⁶い、死骸之儀は取片付⁹⁶い様被仰
付、村所に引取⁹⁶いニも遠路之儀ニ付、仲間相談之上淺草橋場日
蓮宗長昌寺に相願取置いたし、貞右衛門法名覺全号し、長吉法
名玄入と号シ、依之乍恐書付ヲ以⁹⁶御訴奉申上⁹⁶い、以上、

右宿淺草町

天保十四年壬戌九月三日

上総屋治右衛門

代 小八

右之通り御訴申上げれば、跡部能登守様被申けるハ、皆々奴等
は病死いたし大難を竄^{〔竄〕}たり、富士太郎・文太郎・菊次郎、此者
は捕子いたし置^{〔こ〕}い時、悪口雜言を申、廿九人之弁當を改メ唾^{〔ツベ〕}を
仕掛取次致段、八州之手先より口書に加⁹⁷差上候故、其科に依
而打首に可致と荒増科ハ極りける、

〔御吟味の上から落ちて貞右衛門

死んで我身ハ苦痛竄れし〕

第十三卷

穢多といえ共魂魄は上下もなく、九月下旬に至り比企郡大倉村（無名）廣徳寺は遊行、彼等菩提處なれば、遙々来りし様子有之、住僧被申けるハ、明日は何方々カ佛来る也と師弟ニ咄しけれ共、一向に沙汰も無く、住僧ハ不思議ヲ悟り、是は長瀬村之囚人之内にて病死いたしけるものと悟りしは適賢者ト思われ、（たふ）去れ（たふ）ば、住僧其夜の夢に長瀬村貞右衛門・長吉貳人連にて當寺に來て申けるハ、此度我々共冥途に趣ければ何卒御血詠を御願申（り）と見在と願れ言ふとひとしく跡ハ廣き野原となりて、原中トおもひハ杉森杯なり、晝社の前に紙幘り五本立て參詣之者袖をつらね悉く賑也とおもひし所、眼が落て獨可笑く思ひて後に近憐之者語りいたしける、

穢多しんで時宗のそうにかむかな⁹⁹

惣而咒咀事も法事も利詰なれば、如是書認め血詠二ツに封し込て下男に言付、長瀬村にまえり委敷様子を聞札し、其上にて此血詠を渡し墓の形ち造り、是を埋へしと申付遣しける、寄持も頼母敷御方なり、誠に口ハ禍の門にして己か口より禍を招き、既に磔にも行われし處、病死にて竄れたれば、

御吟味の上から落て貞右衛門死ンデ

我身の苦痛竄し¹⁰⁰

閏九月廿四日小川村仙吉殿江戸表に罷越、駕屋新七方ニテ被申は、御出役様方より穢多一件入用之義は無差間穢多共より可

差出旨被爲申聞の聞、此段分頼申置ひ而帰村被成ける、無程十月ニ至り手鎖御改等御吟味之上、病死いたしし者も有之の得共、何れも同様なれば委敷印にいとまあらす、

乍恐書付を以奉申上ひ

久貝因幡守知行所

武州入間郡長瀬村¹⁰¹

小頭与兵衛組下

茂 吉

右之者、去ル七日々病氣取付、同村穢多平蔵ヲ看病人ニ付置、腹薬養生差加に罷在の所、今朝俄ニ取詰メ九死一生にて腹薬不行届か、昼九ツ時病死仕の聞、此段御訴に奉申上ひ、以上、

浅草新丁

十一月十五日

上総屋代

金 八

御奉行所様

右茂吉病死御届ケ仕、嘉三郎並上総屋手代金八相頼御訴奉申上ひ處、病死之趣御聞濟相成ひ、茂吉義は勝手次第取行ひの様被仰付六ツ時帰宿仕ひ、最翌十六日御屋鋪様にも御届ケ申上ひ、此段病死之者数多有之の得は、追々若斯之文面を差上、死人名前は記して甲斐なく右之通に而取行いたしける、尤長瀬村差添人之儀は願出を以替りく罷出候、其節之代合之儀は百姓代善藏出府いたし月日を送る、極月廿七日ニ至り御奉行所様より手

鎖人¹⁰³」御封印御改ニ付、右善藏差添罷出、其節御被改ニ仰聞
いは、此次之封印改之義は来ル辰正月十七日御改之趣ニ御座
間、因茲善藏義は廿八日内帰村いたしける、

第拾四卷

始メ有は終有、復有身は有命、此騷動發起シテより星霜を送り
て既に雖及晝年に、是と言科人もあらず、然レ共騷動において
ハ此上なし、¹⁰⁴「長瀬村三拾六人之もの共荒増御調いたし候上ニ
而追く病死いたし、壹村不限重立ひ者共、老若共ニ三十四人冥
途に越ければ、今は訴詔方にても王将之無き象基を指ニひとし
く、御糺等も自然と等閑り御呼出しも無之處、猶亦當辰五月十
日 御本丸御炎焼ニ付一兩日御延日有之、^{〔當辰五月〕}同十四日御奉行所様
にて死残りの穢多ども彈左衛門方に申付、右之者共残ざり天窓
に致し、其上所追放可致旨被 仰渡御引渡シに被成ひ、同十六
日越生今¹⁰⁵」市村喜兵衛其外村く差添人不残御呼出し有之はニ
付御白洲に罷出ひ處、増田作右衛門様被仰ひは、其方ども義永
く江戸詰いたし處、穢多共儀追々病死いたしニ付、残之者
共去ル十四日此方より申付彈左衛門方に引渡殘切天窓ニいたし
所追放申置也、右之趣承知可被致、因茲、村く差添人共勝手次
第帰村可致旨 被仰渡ひ、最も越生今市村喜兵衛、長瀬村役人
に別段申渡有之、右一条相済ひ上は御白洲御清浄^{〔清浄〕}いたし、右
村¹⁰⁶」鑑三貫文宛科料申付る者也、右之趣村役人共承知いた

し、當六月十五日限り当役所迄急度可致持参者也と被仰渡け
る、訴詔方今市村喜兵衛其方儀組合村々を騷し其科重し、因
茲、其方鑑三貫文、村役人五貫之右之通過料申付る者也、右は
六月十五日限り當役所持参可致者也と嚴重ニ被仰付、無為方御
受仕ひテ皆々帰村いたしける、去れば光陰ハ矢のごとく無程六
月十四日^{〔二〕}至り、両村之役人并喜兵衛申合せ、¹⁰⁷「右被仰ひ通
り、長瀬村役人三貫文、越生町ノ八貫文持参いたし、須田町貳
丁目鷲屋新七殿相頼同道いたし、虎之御門外跡部能登守様御役
所へ差上ひ得は、御老中、旁御立合之上にて御受取被遊ひ、夫よ
り須田町に立戻り宿に御禮等致しければ、^{〔思く〕}新七殿も氣之毒ニお
もひ人之難儀ヲ歌にはよまねど、
隙をかき錢を遣ひし其上に
言付られて過科とらるゝ¹⁰⁸」
咄しも言やうにて歌に成り、兎角言葉は言様言品に依て高名に
もなり、又騷動ニも成り、慎へきハ口なり、昔シ津の國住人須
藤兵衛と言者當年廿八歳血氣壮りの侍なれども、妻の謀を以終
に夫婦共長柄の橋樑に建られ命を失ふ、是皆口故也、此者辭世
口故に夫婦長柄の人ばしら
と賦したまへ、妻此うたを聞て、
人をおとさバ穴ふたつほれ¹⁰⁹」
と讀けれハ、ひとく、是を聞て妻は悪き者也と申あげければ、
清盛の御下知にて彼の女の舌ヲ抜、大竹の簀に巻立て橋の樑に
築れしはあわれなりける次第也

諸此卷中ハ世上に對し憚り多き事、誠に野鄙にして見る人の不興なるもあり、是省きても品多けれハ、先机上に筆を捨待りぬ、

一其頃の 公方様は 東照大権現 家康公様¹¹⁰と奉申、其節之御老中方ハ

土井大炊頭 真田信濃守
牧野備前守 阿部伊勢守

(綠墨)

夫貴賤に不限、神仏儒の三道を尊事ヘ世の常なり、四民の外にして身の分限をしらず、よき程を不弁者に豈仏神の罰を請けざらんや、罰の文字ハ無礼、無正、無理、無道の四ツを討と書也、物月のいらざる事を綴して笑ニするものも有まし、後世の記録ニはかり不限、仏の誓い難有を印見る人善道ニ導、邪を要し、正しき愛したるを唯見んも、本意なく盲目の視込、聾の耳をそはたつるに似たれとも、物月の心の配碎にめてゝ禿筆を揮¹¹¹い、跋二道歌一首をのふる事しかり、

邪に降雨こそハなかりけり

風のあしきニ習ふ世の中

お龜

八目述

(跋文の後尚一、三葉の附録あるを以て別ニ写して後篇の後ニ附す)

(録墨)

長瀬宮寺故村長藏本ニ就て校合し畢、

大正甲子歲仲春三月(即十三年三月一日)

子龍氏又識

読本ハ卷上、下を分たつして一冊と為せり、筆蹟美事なり、央より以後ハ筆も倦怠を催して大ニ其畫を亂し、随つて脱文らしき処多し、今之を訂せず、其儘を行間ニ移せり、

読本ハ著者の原本ニ殆きものにしあれど、卷末ニ及んでハ此本の詳細なるニ如かず、

字の左旁ニ点せるハ宮寺本に無きもの、字の右旁ニ点せるハ宮寺本も如此く表するなり、

(黒墨)

此本ハ明治の央なる時代ニ筆工を請ふて騰写せしものなれば、其誤字多く、為ニ解読する能ハざる處あり、其原本は何処より借り得し者なりしや、今より之を顧みれば不明ニ属す、□筆工が自ら素出をしたるものなれば、概ね下川原市場辺の人の藏本なる可しと思へる、其卷分て二冊なりしをハ余今尚之を記憶す、

(朱墨)

大正十二年五月中院、市場山崎一平所藏本ニ拠て校合す、然れとも其上卷而已、下卷ハ見當らざる趣にて搜索中と云へり、(原本二冊)

大徳子龍識¹¹²

穢多驅騷動記、後編

弘化二巳年四月五日 穢多驅騷動記後篇

武藏国入間郡長瀬村穢多一件御裁許写

差上申一札之事

記(仲村) 武州長瀬村穢多共徒党いたし、同国如意村弁之助其外之者に及狼藉し趣入御聴、関東在々為御取締御廻村被成、御代官北条雄之助様・林顔差太左衛門様御手附御手代中ニ被召捕、於場所一ト通御糺之上、跡部熊登守様御勘定御奉行之節御差出シ相成、引合之ものともを被召出、再應御吟味之上左之通り被仰渡、

穢多 一六之丞儀、同国越生今市村喜兵衛宅ニおゐて、村内穢多辰五

郎儀、瀧野入村仲右衛門と及口論いゝ事起り、喜兵衛外式人々手荒の手扱受い由相咄しを村内穢多万蔵外巻人俱ニ承りい所、喜兵衛面会訳立て「貰旨萬蔵申に、辰五郎俱ニ同道いたし、一同喜兵衛宅に罷越、辰五郎を手荒之及取扱い次第訳立可呉様高聲ニ申仰り、其砌右場所通りい村内穢多茂吉一同土足ニて家内へ踏込、家財等投散及狼藉い始末不届ニ付、^{カマクラシ}之上江戸拾里四方追拂被仰付い、

但御構場所徘徊致間敷段被 仰付い

一文太郎 菊次郎 穢五郎 忠蔵 仙之助 忠七 倉吉 重助 目蔵 由右衛門 寅松 勇七郎 定七 文八 文未^カ 富士七郎^{アリ} 辰五郎 駒次郎 八五郎 喜十郎 音八 定五郎 重五郎 留五郎 新次郎 六助 儀、村内穢多茂吉小屋へ同国如意村弁之助其外之者共、関東御取締御出役手先之由申成、理不尽ニ押入及狼藉、其上金子等奪取い間一同取籠置い趣申觸、且弁之助等為取戻と多人数押参りい趣ニ付、右防方いたし様万吉・林蔵等申聞いを実事と心得、一同茂吉小屋を取囲、或ハ万吉等」任申ニ竹鎖・竹かんな・目潰等拵立、又は銘目印之ため髪に白紙を結付、一同屯致し罷在、文七郎・富士七郎ハ蕎麥入い熱湯を用立、喜十郎・勇七郎は徒党之もの共に食料之飯米舂立方をもいたし始末、不埒ニ付一同手鎖被仰付、忠蔵・寅松・八五郎・新次郎も存命ニハハ同様被仰付い所、病死いたしニ付其旨可存段被 仰渡い

一重左衛門 藤吉 富松 清次郎 萬太郎 次右衛門 源五郎

清吉 幸右衛門 次郎 儀、同国長瀬村ニ騒動有之趣承り、親類懇意之ものは為見舞銘々取付の節、為用意棒又者嵩口等持参いたし子細相尋の処、同国如意村弁之助其外之もの共岡本御取締御出役手先之由申偽り、右村茂七小屋に理不尽二押込、金子等奪取の間一同及籠置の処、弁之助等為取戻と村之もの共多人数押参りの二付、右防方助力いたし呉の様同村藏多万吉・林蔵等申聞いを、實事と心得寄集いのもの共一同屯、致し罷在の始末、重左衛門は小頭をも相動の身分別而之儀、一同不埒二付十右衛門は小頭御取放、其外之もの共一同手鎖被 仰渡の

一喜八 熊蔵 清八 徳五郎 三次郎 七五郎 金五郎 岩蔵
仙助 太吉 亀五郎 八五郎 紋次郎 勝右衛門 勘右衛門
多八 権七郎 松右衛門 清吉 民蔵 栄次郎 多七 安右
衛門 半三郎 源左衛門 長蔵 喜三郎 丑五郎 利右衛門
清蔵 秀吉 万吉 初五郎 茂吉 瀧蔵 八十吉 市兵衛
権蔵 亀吉 岩五郎 文吉 鏡五郎 瀧蔵 豊吉 権四郎
安七郎 喜三郎 源右衛門 清吉 八百吉 儀、同国長セ村ニ騒動有之趣承り、親類懇意之もの共は為見舞と銘々取付、子細相尋の処、同国如意村弁之助其外之もの共、関東御取締御出役手先之由申偽、右ニ付藏多茂吉小屋に押入、金子等奪取の間一同取籠置の処、弁之助取戻として多人数押参りの趣二付、右防方、致呉の様万吉・林蔵等申聞いを實事と心得、竹鎗・竹かな等請取寄集いのもの共一同屯いたし罷在の始末、

半三郎は小頭をも致し身分別而之儀、一同不埒二付半三郎小頭は取放、其外之もの共一同手鎖被 仰付、亀吉も存命ニハハ同様被 仰の処、病死いたしの間其旨可存段被 仰渡の
一長瀬村藏多共儀、同国越生今市村喜兵衛宅ニおるて及狼藉の藏多茂吉為召捕と、同国如意村弁之助其外之もの共茂吉小屋に立入のを、藏多万吉・林蔵等取計ヲ以取籠置、又ハ弁之助等取戻として村々のもの共押参り風聞有之、近郷藏多共に加勢之儀申遣、多人数駆集り騒動ニおよびの節、委細之儀は不存、銘々病氣又ハ足弱とハ申狼狽罷在、右場所に罷出いのもの共を可差出心付も無之、其儘ニ打過の始末不埒二付一同急度御叱被置の、

一長蔵儀、同国長セ村ニ騒動有之由を以、同村藏多共々加勢之儀申、趣の処、得と子細も不相札、右場所に罷越の節、右ハ長瀬村藏多辰五郎外害人義、同国越生今市村喜兵衛宅ニおるて及狼藉の段、為捕方如意村弁之助等、右長瀬村藏多茂吉小屋へ立入のを、其儘差留置の由承り、如何之儀と乍心付、右之もの共取戻として多人数押参り趣ニ而、危急之折柄難及断れ込、同村藏多萬吉任申二同人等一同防方手配いたし、其上弁之助等姓名書差出方之儀与兵衛俱ニ及掛合、又は弁之助等数日及籠の而は藏多共後難之程難計存の込、猶与兵衛ヲ頼受、内分にて村方へ引取呉の様、尚又弁之助等及掛合の始末、旁々不届ニ付所拂被仰付の、

一万蔵 熊吉儀、同国長瀬村藏多共騒立の節携の儀は無之の而

も、右徒党人数加りもの共追々被召捕、村方へも手配有之の趣及承り、無実之難儀可掛も難計、其段彈左衛門に可申出と存い処、有跡之儀申立いてハ長瀬村仲一間ども不屈之所業相

顕い迎、近郷村々百姓共徒党致し、木太刀・鍔鉈等を持理不尽ニ穢多共居宅踏込、居合いの共を差押杯事実相違之儀訴状ニ認メ彈左衛門に申立、町奉行所に訴出い始末不届ニ付所拂被 仰付い

一まき 市五郎 儀、関東御取締御出役手配之趣をも同国如意村弁之助其外もの共茂吉為召捕立入いを、仲間万吉・林蔵等取計ヲ以取籠い砌、驅集い穢多共人氣勵べくため、右弁之助其外之もの共は茂吉小屋に立入い盜賊之趣ニ偽り申觸い杯、万吉等任申如何之儀と乍心附、其段驅集りい穢多共は事実之様ニ申聞、追而関東御取締御出役於場所ニ御札シ節も一旦同様相違之儀申立始末不届ニ付、まきは押込、市五郎は手鎖被仰付い、

一八兵衛 儀、三郎を無宿とハ不存いとも、得と身元も不相糺、数日、小屋に差置い段不届ニ付、急度御叱被 置い、

一彈左衛門 儀、武州越生今市村百姓喜兵衛小宅ニおゐて、同国長瀬村穢多辰五郎義、瀧野入村仲右衛門と及口論い節、喜兵衛外貳人手荒之取扱致い迎、仲間茂吉外貳人と申合、喜兵衛い踏込及狼藉いハ越生今市村市日ハ穢多共出商之儀同村役人共差留いを、喜兵衛無詭手荒の取扱および上、右村市日に穢多とも出商差留い由、又ハ同国如意村弁之助其外之もの

共関東御取締御出役御差図之趣を以、為捕方右茂吉小屋に立入いを、長瀬村穢多共多人数徒党いたし取籠置い儀を押隠、穢多小頭与兵衛重立申合、右弁之助等理不尽ニ茂吉小屋に立赴及防方い趣、或同国中野村万蔵外吉人義、長セ村穢多共は勿論其外徒党之もの共召捕として、右御出役御立入いを近郷村々百姓共徒党いたし、穢多共居宅に押込及狼藉い杯、就れも事実引連相違儀申立いを、得と実否も不相糺、夫々差出し訴状へ奥書致、町奉行所へ、差出し、殊ニ右跡穢多共多人数徒党致し騷動および儀にも不心附罷にい始末不届ニ付、押込被 仰付い、

一穢多辰五郎 万吉 林蔵 長吉 歌五郎 九右衛門 辰五郎 万蔵 蔵吉 同小頭与兵衛 無宿三郎儀、辰五郎同国越生今市村喜兵衛宅ニおゐて、瀧野入村仲右衛門と及口論い節、喜兵衛嚴敷叱りい迎及惡口い処殿、同外式人手荒之取扱致いを心外ニ存、夜中喜兵衛宅に表口打たき雜言等申言り、追而右次第村内穢多万蔵外式人に咄し聞せい処、喜兵衛面会訳立可貫旨万蔵申ニ同意いたし、同人并村内穢多六之丞全道喜兵衛方に罷越訳立可貫旨高声ニ申言り、折節通掛り村内穢多茂吉一同土足ニ而座敷に踏込、有合の家財等投散及狼藉、剩右段越生今市村役人共々市場商差留い処、穢多小頭与兵衛等申合、喜兵衛相手取及出訴い間、関東御取締御出役御手配之趣ヲも、村方立入い全国如意村弁之助其外之もの共、村内穢多と一申合取籠置、穢多共徒党いたし立騒い次第生承り与

兵衛申合、右鉢其身并ニ外穢多共不屈之及所業の段は押隠し、越生今市村のもの共無諍。市商差留の様に、殊ニ茂吉小屋に右弁之助其外大勢乱入致し、諸道具等打毀し候様事実相違いたし、儀相認、理不尽出入之趣を以町御奉行所様へ御訴申、剩及徒党の穢多共右御出役ニ被召捕の由及承りの節、尚又事実引違越生今市村之もの共徒党いたし、又は穢多共小屋に立入乱妨狼藉ニおよひの段与兵衛俱ニ出訴いたし、万吉・林蔵ハ同国越生今市村喜兵衛宅におゐて滝野入村仲右衛門村内穢多辰五郎及口論の事起り、喜兵衛外式人手荒之取扱ひを、辰五郎憤り仲間万吉外式人一同喜兵衛宅に踏込及狼藉の二付、右村役人方に穢多与兵衛代として罷越の節、辰五郎ニ詰可致旨談ひハ、取計方も可有之の処、与兵衛に申通ひ迄にて其儘ニ捨置、既ニ右段穢多共越生今市村市場商之義差留請ひを、却而喜兵衛相手取及出訴の積り与兵衛一同¹⁰申談、同人并辰五郎共出府致の後関東御取締御出役衆御差図之由にて、村内穢多茂吉御召捕として同国如意村弁之助其外之もの共罷越の処、右越生今市村之者々右御出役に品能申立の故之儀と推量致相憎し、所存心得違、万吉重立申合ひ、茂吉小屋に立入の盜賊の趣ニ申觸し、猶申口を可固た茂吉母まき外老人にも其段事実之様ニ為申觸、村内の者共呼集老人も取逃聞敷申聞、弁之助其外之ものとも茂吉小屋に押込置不屈押包へくため、弁之助等右小屋に踏込乱妨ニおよひ無余儀差留置の段書状ニ認め、万蔵外老人に相渡し、右書状之趣ヲ以其節に申立ひ処、

与兵衛可申通旨申含同人方に差遣し、且弁之助等為取戻と村々之もの共罷越の処、風説ニ相聞ひ逆万吉発言いたし、林蔵・定右衛門等申合、近鄉村々穢多共に加勢申遣し、竹鑓・竹かんなど用意いたし、近々駆集まりのもの共へ相渡し、村内のもの穢多共は目印ニ髪に白紙を結付襷ヲ掛、一際花やかに可働様其外人¹¹、氣を勵しい共。及差図ニ茂吉小屋は釘¹²、又は櫓子等にて取囲、或ハ弁之助一同罷越の越生今市村政右衛門倅惣兵衛竊かに居村ニ申遣し、穢多共小屋に火を掛ひ由不取留儀承り傳へ、同人に繩を掛、又七・弁之助其外之者共所持の脇差・木太刀取上置、村々人数押参ひハ、可及闊論と大勢屯致し待居罷在、追て右御取締役御出役衆を御呼出し有之、弁之助等可差辰旨御利解請ひ節、無宿三郎を穢多林七・九左衛門を小頭之由ニ申偽り差出し、弁之助其外一同夫々村方に引渡し相済ひ上江戸表に罷出、与兵衛俱ニ打合、右等次第ハ押隠し、弁之助其外之もの共銘々棒・蒿口・木太刀等携、多人數茂吉小屋に立合。居宅打破り候様訴状文段致弾左衛門に申立、町奉行所に御訴申上、剩其後及徒党の穢多共右御出役之衆ニ被召捕ひ由及承りの節、猶又事実引違越生今市村之もの徒党致し、又は穢多共小屋に乱入致及狼藉の段追訴差出し、定右衛門・長吉・歌五郎・九左衛門と関東御取締御差図之趣を以、同国如意村弁之助其外之もの共村内穢多茂¹²吉小屋ニ踏込の節、右者同国越生今市村喜兵衛宅におゐて、村内穢多辰五郎一同茂吉及不法の始末糾方有之の儀と、乍弁、其已前

右喜兵衛等相手取及出訴い小頭与兵衛に及通達い迄吾人も差返間敷間、穢多万吉外老人任申、右之もの共申合、茂吉小屋に立入い盜賊之趣立申觸し、其場有合い木切を拾い簀を焚立、村方人数集、弁之助ヲ取籠ニ致、殊ニ同人其外之者共取戻之ため、村々多人数押参りい趣風聞有之、防方可致旨万吉発意ニ林蔵一同同意いたし、近郷穢多共加勢之儀申遣ハシ、居合いもの共へ差図いたし、竹鎗・竹かなな等為拵、長吉ハ駆集りい者共に相渡し警固人数ニ立交り、定右衛門・歌五郎・九左衛門は徒党のもの共差引并食料手当の儀等セ話いたし罷在、其上九左衛門は最初右辰五郎儀喜兵衛か手荒之取扱請、心外之旨咄し聞い節、同人方へ罷越訳立可實様万蔵俱ニ申勸又は弁之助等引渡方之儀ニ付、右御取締御出役衆ヲ御呼出請い節、万吉外老人申ニ從へ九左衛門ニ小頭無宿三郎を穢多林七之趣¹³取扱申立、追而於場所ニ御札之節、茂吉方にて金子紛失致しい段ハ無相違旨一旦申張、辰五郎同国長セ村ニ騷動有之之由を以、村方穢多共加勢之儀申越い処、得と子細も不相札、村内之もの共一同場所罷越、右村穢多辰五郎外之人儀、同国越生今市村喜兵衛宅ニおゐて及狼藉い段、捕方として同国如意村弁之助其外之もの共、長瀬村穢多茂吉小屋に立入いを其儘差留置い由承り如何之儀と乍心附、右之者共取戻のため多人数押参い趣にて危急之折柄難及断い逆、同村穢多万吉任申、同人等一同竹鎗・竹かなな・目潰等取拵寄集いもの共に相渡し人氣を勵し屯いたし罷在、殊ニ弁之助俱ニ罷越、

越生今市村政右衛門忤惣兵衛穢多共小屋に火を掛い様不取留風聞及承り、万吉へも申聞い上、穢多共身分をも不顧、惣兵衛に縄を掛け土間に引、番人等附置、万蔵は同国越生今市村喜兵衛宅ニおいて、村内穢多辰五郎義、滝野入村左衛門と及口論い事起り、喜兵衛外式人々手荒の手扱請い次第、六之丞外老人俱ニ承りい節、喜兵衛面会訳立可實旨辰五郎に申聞、同外老人一全喜兵衛宅に土足踏込、其砌右場所通り掛りい村内穢多茂吉一同家財等段投散立騒、又は右茂吉小屋へ関東御取締御出役手配之趣を以、同国如意村弁之助其外之者共立入いを仲間万吉・林蔵重立取計、弁之助等茂吉小屋に立入家財等打破り及狼藉い趣取扱認メ、小頭与兵衛に遣し書状請い節、其身之不届も可押隠、存意々同人任申ニ事実等引違、右書状之趣ヲ以出訴之儀与兵衛に申聞、彈左衛門に為申立、茂吉を同国越生今市村喜兵衛宅に村内穢多辰五郎外式人立立騒居い、得と子細も不相札、右之もの共に荷担いたし一同土足にて座敷に踏込及狼藉、又は村内穢多共越生今市村市場商差留い儀掛合有之、辰五郎并穢多小頭与兵衛等出府致い後、村内穢多六之丞儀、同国小川村武兵衛弟化吉ニ被差押い由承はり、右喜兵衛宅にて及狼藉い次第相頭い義とそんし、右之段与兵衛に為知い積り出府いたし、其儘江戸に罷居、¹⁵追て同人義品々取扱出府致い儀を申合い一同意いたし、与兵衛取計ニ任願人之趣ニ仕成、辰五郎等一同、御奉行所に罷出、与兵衛ハ同国越生今市村喜兵衛宅におゐて、滝野入村仲

右衛門と村内穢多辰五郎及口論い事起り、喜兵衛外三人手荒之取扱いたしを辰五郎遺恨ニ存、村内穢多万蔵外式人一同喜兵衛宅へ踏込及狼藉い段、辰五郎等ニ詫為致い様、右村役人共申談いハ、取計方も有之べく処、喜兵衛仕成も不宜い迎、其儘ニ捨置、右故穢多共越生今市村市は商之儀差留を請しを、却て喜兵衛等相手取及出訴い積り申合、辰五郎差添俱ニ出府いたし後、関東在く御取締御出役手配之趣を以、村方に立入い同国如意村弁之助其外之ものを共を穢多共小屋に仲間共多人数打寄取籠い由、右万蔵等出府之上申聞、其節穢多万吉外式人より弁之助等理不尽ニ茂吉小屋に踏込、家財等打破り及乱妨い故、右鉢之取計い旨文通いたしは穢多共不屈之所業押包いため相違之儀認メ差越い事之由承り、右書状之趣ヲ以訴状之段取捨、彈左衛門方に立戻り¹⁶セツ。村内は勿論最寄穢多とも大勢竹鎗・竹かんなを持、茂吉小屋に取囲在いをも乍及見、其分ニいたし置、辰五郎等喜兵衛対し及不法い次第、又は関東御取締御出役手先と乍弁、弁之助等取籠ニいたし儀は押隠し、越生今市村之もの共無謂市場商差留、其上弁之助其外之ものとも多人数得物を携、茂吉方に立入、居小屋戸障子諸道具等打破りい様巧を以訴状取捨綴、彈左衛門與書取之、町奉行所へ出訴いたし、剩及徒党い穢多共、右之御出役衆に被召捕い由及承りい節、猶又事実引違ひ、越生今市村のものども徒党いたし、又は穢多とも小屋に立入乱妨及狼藉い段追訴いたし、三郎は無宿之身分行方々差支い逆、

武州長瀬村番非人八兵衛小屋ニ罷在、其上同村穢多茂吉小屋同国如意村弁之助之ものとも踏込、右者関東御取締御出役之衆手配之由乍弁、弁之助等茂吉小屋立入及乱妨、家財等打破りい趣事実相違之儀、与兵衛方申遣し書状認異¹⁷い様万吉其外之ものとも申聞、如何之義と乍心附、右書状認遣し、殊ニ弁之助引渡方之儀ニ付、右御出役越生今市村に御着の上穢多小頭等御呼請い節、是又万吉等任申身分押隠し、穢多林七之趣ニ申立罷在い始末、一同不屈至極ニ付、存命ニハ辰五郎・茂吉・万蔵ハ敵之上中追放、万吉は獄門、林蔵は死罪、定右衛門・長吉・歌五郎・丸左衛門は重追放、辰次郎は江戸拂、三郎は敲可被仰付處、一同病死いたし間、其旨可存段被 仰渡い、

一右之外先達而御吟味ニ付被召出い者共は、不埒之筋も無之御構無御座い間、今般罷出ものともには其旨最寄村役共可申通段被仰渡い、
右被仰渡之趣、一同承知奉畏い、若し相背いハ、重科可被仰付い、仍御請證文差上申い、如件、

久貝因幡守知行

武州入間郡長瀬村¹⁸

穢多 六之丞

文三郎

久三郎

菊次郎

弘化二年四月五日

穢五郎

穢多驅騷動記(仲村)

權次郎倅	辰五郎倅	長五郎倅	半 [□] 。	半藏倅	同人次男	寅松倅	仙之助倅	由左衛門倅	万吉倅	同人次男	米次郎倅	文太郎倅	右文太郎弟	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"
栄次郎	幸七郎	音五郎	留五郎 ₂₀	重五郎	六助	定五郎	常吉	乙八	喜十郎	駒次郎	辰五郎	勇次郎	富士太郎	久八	文七 ₁₉	定七 ₁₉	勇太郎	由右衛門	貝藏	重助	倉吉	忠七	仙之助

直藏	喜四郎	市五郎	富藏	宇之助	久次郎	平藏	惣五郎	佐七	徳藏	文五郎 ₂₁	吉五郎	藤吉	万次郎	清吉	仲右衛門	鍋松	文七	栄吉	太兵衛	八五郎事	同人親類	茂吉母
																				鍊五郎	市五郎	まき

彦次郎	弥五郎	平六	堂心	右惣代	土屋膳右衛門知行	同郡中野村 ²²	穢多	松平大和守預分	同郡豊田本村	穢多小頭	重右衛門代	佐兵衛	藤七	富五郎	清次郎	万太郎	次郎右衛門	源五郎	清吉 ²³	幸右衛門	次之助	右重右衛門倅	同領坂戸村
				平藏			万藏																

穢多嘉七倅	清八倅	同領中小坂村	穢多	瀧藏	豊吉	権四郎	安五郎	喜之助 ²⁴	源右衛門倅	清吉	庄藏倅	作右衛門倅	藤八倅	同領野村	穢多	八百吉	松平十左衛門知行	同領高麗郡女影村	喜八	熊五郎	清八	徳五郎	三次郎 ²⁵	七五郎	右大和守預分
岩五郎	文吉		鍊五郎																						

同国下廣谷村	磯多	金五郎
〃	岩藏	
〃	仙藏	
藤石衛門倅	太吉	
由藏倅	龜五郎	
磯石衛門倅	八五郎	
同領小堤村	磯多	
〃	紋次郎	
〃	勝右衛門	
孫七倅	勘右衛門 ²⁶	
長右衛門倅	太八	
吉兵へ倅	権太郎	
藤吉倅	松右衛門	
大熊善太郎御代官所	清吉	
同郡下鹿山村	磯多	
〃	民藏	
〃	栄次郎	
〃	太吉	
大和守領分	安右衛門	
同国比企郡松山町 ²⁷		

微多小頭	半三郎	源左衛門	長藏	喜三郎	丑五郎	利右衛門	清藏	酒井隱岐守知行	日比野定次郎	同郡高坂本宿	微多小頭	彦右衛門伴	秀吉	万吉	初五郎	茂吉	八十吉	善太郎御代官所	同国大里郡和田村	微多	市兵衛	長藏	重藏伴	榎藏	白川太郎助左衛門御代官所	同国多摩郡藤橋村	微多	熊吉
------	-----	------	----	-----	-----	------	----	---------	--------	--------	------	-------	----	----	-----	----	-----	---------	----------	----	-----	----	-----	----	--------------	----------	----	----

御奉行所

越生今市村 金子屋藤次郎

彈左衛門²⁹

原書三十九葉、誤書多くして判読の処多し、猶疑問ニ属せる者へ、字右ニ小圈点を附して以て他^他日の校正を待つ、文理太甚読下らざる処多き濫ニ訂正を加えす、此書川角村市場山崎一平の舊蔵なり、大正十二年五月廿六日霽霜窓暗き時字ス
大得子竜氏識³⁰

長瀬宮寺本ノ附録ヲ爰ニ騰載ス

大正十三年二月廿九日夜

落し咄し

有鄙^{いふ}郷村之者拾四五人出合い道を作りし折から、宰領役人より休を出しけれハ、人足之もの直様楯を投棄て、手々に芝を折て樹^{ツグ}を見たてゝ休らい、爰にて謎を懸たり、縄付の囚人三十六人とかけて何と解と云けれハ、それか我々身分にて解る物か、夫を解くと此方が囚人にならア、そばに居た人、そんなけがれた謎を考て解事はねへ、ながせく、

右騒動ニ付、彈左衛門 閉門、預人喜兵衛 百日手鎖宿預ケ、弁之助・千吉同断、右穢多辰五郎・茂吉・万蔵ハ敵之上中追放、萬吉ハ獄門、林蔵ハ死罪、貞右衛門・長吉・哥五郎・九右

衛門ハ重追放、三郎義ハ敵、右之者共存命ニハ、可申付処、一同病死致じしニ付、其旨可存段仰渡り、右之外先達て御吟味ニ付被召出い者ハ不埒の筋も無之、御構無御座り間、今般不罷出者共へハ其旨最寄村役人共より可申通段被仰渡、右被渡り趣、一同承知奉畏い、且過料錢ハ築山茂左衛門様へ可相納旨仰、是又承知奉畏い、若相背りハ重科ニ可被仰付い、仍て御請證文申処如件

巳四月五日

御奉行所

跡部能登守様

中坊駿河守様

久須美佐渡守様

文老人
物 月

瀬 匪 三 稿

匪徒最期表

天保十四年八月、長瀬東部落ノ匪徒敗レテ捕ヘラル、ヤ、皆之ヲ越生ニ集収ス、其數約二百五十ノ多キニ達セリ、各戸ノ空部屋ヲ徵發シテ仮監禁所トシ、白鉢巻白櫛ノ人夫數百人ノヲ護衛シタリ、然シテ八州官ハ寄場大惣代ノ宅舍ヲ仮役所ニ宛テ、爰ニテ吟味取調アル、殆ト一句、其罪輕キ者ハ概ネ直ニ釈放セラレ、其重キ者九十七人ヲ裁定シ、之ヲ江戸ニ送クツテ獄ニ投ス、勘定奉行ノ裁判數閏月、弘化二年四月ニ及ンテ其罪終ニ決定シ、所謂裁許狀ノ發表アリタリキ、然ルニ此際ニ及テハ、既ニ囚人ノ生存セルモノ殊ント無ク、其多クハ獄中ニ在テ、其取調ノ濟次第ニ日ヲ追テ病死シ盡シタルノ觀アリ、蓋シ當時ハ「之ヲ牢死ト唱ヘテ、即チ一ノ刑名ニ匹ス可キモノニシテ世人敢之ヲ怪マザリシ也、然シテ司獄ノ法ニ於テハ、此未決囚中ニ藥死セシメラル、之ヲ御慈悲ト稱シテ永ラクノ苦痛ヲ免レ、且ツ未タ罪ト成ラザルノ故ヲ以テ、郷里ニ帰葬ヲ許サル等ノ事アルヲ特典トシテ取扱ハレタルモノナリト聞ケリ、因テ匪徒九十七囚中牢死セル者殆ント六十人ニ及ブ、其最後ノ悲慘アリトハ云ヘ、口憫然タラサルヲ得ンヤ、爰ニ最後表ヲ作ル、

表中ノ欄ニ列記セル囚人ノ名ハ、穢多驅騷動記ノ後編タル御裁許寫ヲ標準ト爲シタリ、然ルニ誤書ハ轉載ノ數々ナル誤謬尤甚シクシテ準拠シ難キ処多シト雖共、他ニ良本ナキヲ以テ今姑ク之ヲ用タリ、

行間イ字ヲ冠ラセテ並ヘ記スルハ專ラ瀬匪小記ニ拠ル、其出牢、帰村、²「牢死等ノ記入モ一々同書ヨリ出ツ、

最上欄ノ罪名、次欄ノ罪狀概目ハ御裁許寫ニ拠ル、

御裁許書ニ囚人皆地名ヲ挙ゲズ、是レ編者力推定以テ掲載シタル所タリ、

帰村被差許ノ人名ハ某村某外幾人トアルヲ以テ、悉ク推定スル能ハス、

帰村被差許タルモノニシテ死者アリ、是レ病死ナル可シトハ想赦免ノ前夜ニ一服ノ雄ヲ賜ヘルモノ故ニ

フモ、然レ共執レモ日ヲ同フシテ多クノ死者ヲ出スニ由レハ、

或ハ一旦ノ仮出牢ト成リタルモ再ヒ喚ヒ喚シテ吟味セラレ、復

獄中ノ人ト爲ツテ牢死セシメラレタルモノナルカハ自今不明ノ

事ニ属ス、由テ之ヲ記スルニ単ニ死ノ一字ヲ下シタリ、

人名ノ上ニ△点ヲ附シタルハ、御裁許寫ニ在ラザリシ者、瀬匪

小記ニ由テ補記ス、蓋シ御裁許寫ニ筆者力脱落セシモノト認メ

ラル、¹

(朱書) 朱点及朱書ハ瀬匪小記ニ拠テ校合セシモノナリ、

大正十三年六月十二日梅雨如烟窓下ニ於テ

大徳子龍 識

(註 死者アリ……不明ノ事ニ属ス、まで抹消)

戸蔵ノ上江 四方追捕	展五郎ヲ教唆シタル共奉行ヲ助ケタル	九月十一日出牢		九月十七日牢死	全	長瀬	六之丞	一
手鎖	出役ヲ監禁シ、竹槍等ヲ携ヘテ屯集監視ヲ 為シタル富士太郎ト共ニ鐵線熱湯ヲ以防禦 ニ力トメタル（出役ニ為シタルまで抹消）		九月十七日牢死	全	文太郎			一
〃	出役ヲ監禁シ竹槍等ヲ携テ屯集監視ニ当リ タル	九月十一日出牢		全	菊次郎			一
〃	〃			全	磯五郎			一
〃	〃			全	仙之助 イ専之助			一
〃	〃		九月十七日牢死	全	忠七			一
〃	〃	九月十一日出牢		全	倉吉 イ庫吉			一
〃	〃			全	重助			一
〃	〃			全	貝藏			一
〃	〃			全	由右衛門			一
〃	喜十郎ト共ニ糧食供給ニ当リタル			全 未定	勇太郎			一 5

穢多驅騷動記(仲村)

手鎖	出役ヲ監禁シ竹槍等ヲ携ヘテ之カ監視トシ テ屯集シタル	出役ヲ監禁シ竹槍等ヲ携ヘテ之カ監視トシ テ屯集シタル	出役ヲ監禁シ竹槍等ヲ携ヘテ之カ監視トシ テ屯集シタル	出役ヲ監禁シ竹槍等ヲ携ヘテ之カ監視トシ テ屯集シタル	出役ヲ監禁シ竹槍等ヲ携ヘテ之カ監視トシ テ屯集シタル	出役ヲ監禁シ竹槍等ヲ携ヘテ之カ監視トシ テ屯集シタル	出役ヲ監禁シ竹槍等ヲ携ヘテ之カ監視トシ テ屯集シタル	出役ヲ監禁シ竹槍等ヲ携ヘテ之カ監視トシ テ屯集シタル	出役ヲ監禁シ竹槍等ヲ携ヘテ之カ監視トシ テ屯集シタル	出役ヲ監禁シ竹槍等ヲ携ヘテ之カ監視トシ テ屯集シタル
手鎖	出役ヲ監禁シ竹槍等ヲ携ヘテ之カ監視トシ テ屯集シタル	出役ヲ監禁シ竹槍等ヲ携ヘテ之カ監視トシ テ屯集シタル	出役ヲ監禁シ竹槍等ヲ携ヘテ之カ監視トシ テ屯集シタル	出役ヲ監禁シ竹槍等ヲ携ヘテ之カ監視トシ テ屯集シタル	出役ヲ監禁シ竹槍等ヲ携ヘテ之カ監視トシ テ屯集シタル	出役ヲ監禁シ竹槍等ヲ携ヘテ之カ監視トシ テ屯集シタル	出役ヲ監禁シ竹槍等ヲ携ヘテ之カ監視トシ テ屯集シタル	出役ヲ監禁シ竹槍等ヲ携ヘテ之カ監視トシ テ屯集シタル	出役ヲ監禁シ竹槍等ヲ携ヘテ之カ監視トシ テ屯集シタル	出役ヲ監禁シ竹槍等ヲ携ヘテ之カ監視トシ テ屯集シタル
八月廿九日留五	八月廿九日留五	八月廿九日留五	八月廿九日留五	八月廿九日留五	八月廿九日留五	八月廿九日留五	八月廿九日留五	八月廿九日留五	八月廿九日留五	八月廿九日留五
九月十七日牢死	九月十七日牢死	九月十七日牢死	九月十七日牢死	九月十七日牢死	九月十七日牢死	九月十七日牢死	九月十七日牢死	九月十七日牢死	九月十七日牢死	九月十七日牢死
全	全	全	全	全	長瀬	全	全	全	全	長瀬
留五郎 (半□伴)	重五郎 (半蔵伴重五郎)	定五郎 (黄松伴)	音八 (由右衛門伴)	喜十郎 (万吉伴)	駒次郎 (半次郎次男)	辰五郎 (半次郎伴)	勇次郎 (文太郎伴)	富士太郎 (文太郎弟)	文八	定七 (貞七)
16	1	1	1	1	1	辰五郎ナリ 彦五郎アリ	1	1	1	1

手 鎖	召小頭 放役鎖		〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
〃	タルニ 暴動ニ 参加シ 万吉・ 林蔵ノ 意ヲ受 テ屯在 シ					〃	〃	〃	〃	〃
全 上	八月廿九日 重左衛門 外二人									
			十一月廿八日 牢死	閏九月十五日 牢死	九月十七日 牢死	九月十七日 牢死	九月十七日 牢死	九月十七日 牢死	九月十七日 牢死	九月十七日 牢死
全	豊田 (即安生老)		全	全	全	全	全	全	全	全
藤 吉	小頭 重左衛門 又藤七		△豊 吉	△清 蔵	△幸 七 (辰五郎親)	△六 助 (寅松次男)	新 次 郎	八 五 郎	寅 松	忠 蔵
└7	又重右衛門		〃	江戸ニテ被 捕	└	└	└	└	└	└

穢多驅騷動記(仲村)

〃	〃			〃	〃	〃	〃	〃	〃	手鎖
〃	〃			〃	〃	〃	〃	〃	〃	暴華ニ参加シ万吉・林蔵ノ意ヲ受ケテ屯在シタル
				八月廿九日帰村						
九月十七日牢死			八月廿九日牢死 (治之助)		九月十七日牢死	辰三月十日牢死		辰三月十日牢死	九月十七日牢死	九月十七日牢死 (富之助)
女影?	女影		全	全	全	全	全	全	全	豊田
熊 又熊五郎 蔵	喜 八		イ治之助 又次之助 次郎 (重左衛門侍次之助)	幸右衛門	清吉 竹松アリ	源五郎	イ治右衛門 次右衛門	萬太郎 又万太郎	清次郎	イ富之助 富松 又富五郎
一	一		一	一	一	一	一	一	一	一

〃	〃	〃	〃	〃	〃		〃	〃	〃	〃
〃	〃	〃	〃	〃	〃		〃	〃	〃	〃
		八月廿九日帰村	八月廿九日専助 外二人帰村被許		八月廿九日帰村			八月廿九日三次郎外 一人帰村被許 (談一人へ七五郎カ 喜八カ)		
九月十七日牢死	九月十七日牢死		十月廿四日死	九月十七日牢死	十月廿四日死				九月十七日牢死	九月十七日牢死
全	全	全	全	全	下廣谷		全	女影	全	全
八 五郎 (藏右衛門伴)	亀 五郎 (由藏伴)	太 吉 (摩右衛門伴)	仙 助 又仙藏	岩 藏	金 五郎		七 五郎	三 次郎	徳 五郎 イ徳次郎	清 八
一 九	一	一	一	一	一		一	一	一	一

穢多驅騷動記(村村)

〃	〃		〃	〃	〃	〃	〃	〃	手 鎖	≒手 鎖
〃	〃		〃	〃	〃	〃	〃	〃	暴 騷ニ参加シ万吉・林蔵ノ意ヲ受ケテ屯在 タル	暴 騷ニ参加シ万吉・林蔵ノ意ヲ受ケテ屯在 シタル(全文採消)
						八月廿九日太八 外二入帰村被許		全 上	八月廿九日帰村	
九月十七日卒死	九月十七日卒死		九月十七日卒死	九月十七日卒死	九月十七日卒死		九月十七日卒死		辰二月十四日死	
全	下鹿山		全	全	全	全	全	全	小堤	
栄次郎	民蔵		清吉 (藤吉伴)	松右衛門 (吉兵衛伴)	権次郎 (長右衛門伴権太郎)	イ太八 多 (孫七伴)	勘右衛門	勝右衛門	紋次郎	
1 1-10	1		1	1	1	1	1	1	1	

	〃	〃	〃	〃	〃	手 鎖	取 放 小 頭 役		〃	〃
	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃		〃	〃
	八月廿九日帰村			許郎八月廿九日喜三 外四人帰村被	全 上	全 上	八月廿九日帰村			八月廿九日帰村
			九月十七日牢死	辰二月十四日死	辰二月十四日死				九月十七日牢死	辰二月十四日死
	全	全	全	全	全	全	松 山		全	全
	清 蔵	利 右 衛 門	丑 五 郎	喜 三 郎 <small>イ喜之助</small>	長 蔵	源 左 衛 門	半 三 郎 <small>小頭</small>		安 右 衛 門	多 七 <small>イ太七 又太吉</small>
	└ └ ₁₁	└	└	└	└	└	└		└	└

穢多驅騷動記(仲村)

〃	〃	〃	〃	〃		〃	〃	〃	〃	手、鎖
〃	〃	〃	〃	〃		〃	〃	〃	〃	暴挙ニ参加万吉・林蔵ノ意ヲ受ケテ屯在シタル
八月廿九日帰村			八月廿九日権四郎 (外四人帰村被許 凡三人カ)	八月廿九日帰村		八月廿九日瀧蔵 外二人帰村被許		全 上	八月廿九日帰村	
	喜之助 辰三月十日死	九月十六日牢死								九月十七日牢死
全	全	全	全	中小坂		全	全	全	全	高坂 (本宿)
源右衛門 (作右衛門伴)	喜三郎 イ喜之助カ (義八伴喜之助)	安太郎 又安五郎	権四郎	豊吉		龍蔵 此間八十吉等八人脱ス後死	茂吉	初五郎	万吉	秀吉 (小頭彦右衛門伴)
12	1	1	1	1		1	1	1	1	1

中 敲ノ上 追 放	叱	手 鎖	押 込	同	所 拂	所 拂		"		"
越生ニ於暴行シタル	無宿二郎ヲ留置タル	"	出役ヲ盗賊ナリト偽証シタル	"	暴挙ニ参加シ其後処分トシテ詐偽ノ訴狀ヲ呈出シタル	暴挙ニ参加シ其防禦ノ参謀タル		"		"
				全 上	九月十一日出牢					
月 日牢死						九月十四日牢死		九月十七日牢死		辰三月十日死
長 瀬 ?	全	全	長 瀬	藤 橋	二本木	和 田		野 田		全
辰 五 郎	八 兵 衛	市 五 郎 (茂吉親類)	ま き (茂吉母)	熊 吉	万 蔵	長 蔵		八 百 吉		清 吉 (庄蔵伴)
└13				々被 捕	此兩人ハ大 押送ノ後別	└		└		└

穢多騷動記(仲村)

同		同	敲ノ上 中追放	江戸拂	同	同	全	重追放	死罪	獄門
詐偽ノ文書ヲ作成シ姓名ヲ詐リタル	外交及詐偽文書ニ関セル町奉行所ニ詐偽ノ 訴状の提出シタル	自宅ヲ提供シテ出役ヲ監禁シタル、越生ニ 暴行ヲ助ケタル	辰五郎ヲ教唆シテ暴行ヲ助ケタル町奉行所 ニ詐ノ訴状ヲ提出タル	〃	〃	騒擾ニ参与シタル	〃	〃	〃	首謀者タル
九月十六日牢死	九月十七日牢死	十一月十五日 牢死	月 日牢死	九月十五日牢死	九月十七日牢死	十一月廿八日 牢死	閏九月三日牢死	九月廿八日牢死	閏九月十五日 牢死	十月廿四日牢死
全	全	長瀬	長瀬?	女影?	全	全	全	全	全	長瀬
無宿三郎	小頭 与兵衛	茂吉	万蔵	イ辰次郎 辰五郎	九左衛門	イ歌次郎 歌五郎	長吉	イ貞 定右衛門	林蔵	万吉
14	1			女影辰五郎	1	江戸にて被捕	1	1	1	江戸にて被捕

同	「八十吉」より「鑛五郎」までの欄上に「前々紙ノ高坂瀧藏ト中小坂豊吉ノ間ニ在ルモノ」という註が横書してある。(仲村)	同	同	同	同	同	同	手鎖		押込
〃		〃	〃	〃	〃	〃	〃	シタル 疊華ニ参加シ万吉・林蔵ノ意ヲ受ケテ屯在		配下ノ不取締ナル匪徒公安ヲ害シタル
八月廿九日帰村		八月廿九日帰村	八月廿九日帰村			全上	八月廿九日市兵衛 外一人帰村被差許			
				月 日 牢死						
全		中小坂	全	坂戸 (朱) (石波戸)	同	和	高	江		
瀧		鑛五郎	文 (清八伴)	岩五郎 (嘉七伴)	亀吉	市兵衛	八十吉	彈左衛門		
藏										
又清藏 └15		└	└	└	└	└	又八百吉 └			

穢多騷動記 (仲村)

										叱
										騒擾ニ附加賛同シタル
	出牢四十五人 出牢四十三人 出牢五人									
	牢死 四十九人									
				全	全	全	長瀬	≡中小坂		
(朱) 計百十一人 (彈ヲ除ク)	(朱) 彈左衛門ヲ除ク 一百〇八人	(朱) 九十七囚中四人ヲ欠一符 ≡三		(朱) 重次郎	(朱) 栄次郎	(朱) ≡音 ≡五 ≡郎	(朱) 常吉	(朱) ≡清 ≡蔵		長瀬村穢多一同
—16										

天保十四年卯七月廿二日 長瀬辰五郎越生ニ於テ乱暴アリ、
全廿三日 辰五郎復乱入ス、

廿四日 為ニ寄場会議ハ開カレ大小惣代名主集議アリ、
廿五日 八州へ届出トナリ代表者出府シ辰五郎ノ捕状ヲ發セ
ラル、

八月二日 評定所ニ訴フ、

四日 八州手先等出張辰五郎等ヲ越生ニ召喚ス不出、
五日 手先弁之助等犯人逮捕トテ長瀬へ出張遂シ重圍ニ陥
ル、匪徒ハ直ニ急使ヲ派シテ同志ノ糾合ヲ謀ル、

六日 各部落参集四方ニ防禦工事ヲ急造ス、

七日 八州富田錠之助越生ニ来着、直ニ彼ノ重立ヲ召喚シ
弁之助¹⁷等ノ還付ヲ論シテ決行セシム、一行等還ル、

八日 九日? 八州園部團次郎来着、

十日 匪徒全部ヲ越生ニ喚フ、然シラ彼代表者至リ取調ヲ
受ク、

二百五十人ヲ發シテ長瀬部落ヲ包圍シ侵入十九ヲ捕
フ、

十一日 園部八州馬上ニテ人夫三百人銃砲三十五挺ヲ指揮シ
テ厚川・女影・入間川・中野・今井・藤橋ヲ廻リテ
逮捕シ、其夜扇町屋ニ一宿翌越生ニ還ル、

十二日 捕人大ニ越生ニ集マル、

十三日 富田八州上州ニ事アリテ去リ、代テ高橋三蔵来、取
調ヲ行フ、川越組ヨリ豊田・野田ノ捕者ヲ越生ニ護

送シ来ル、¹⁸

十四日? 高橋八州石井寄場人足ヲ率テ、高坂・庚子・松山・

石波戸方面ノ逮捕^{ヲ行フ}ニ從フ、於是越生ニアル囚人二百
四十ヲ數フ、中山大川越ヨリ又第二回ノ捕囚ヲ送り
来ル、於是囚人越生ニ在ル者二百四十ヲ以テ數フ、

十六日 八州中山誠一郎・大熊左助来着、會議ノ上更ニ五十
六ヶ村ノ人夫銃砲百一挺ヲ徵發シテ警戒ニ從フ、中
山・大熊日々取調ヲ開^本速ス、皆園部八州ハ高坂・小
前田・和田方面ノ廻捕ニ向ヒ、大熊八州ハ下小坂・

柏原・下廣谷・二木木方面ノ廻捕ニ向フ、
八州駒崎靜助来着、

十七日 八州駒崎靜助来着、

廿日? 取調終了、村預トナルモノ凡百三十九人、

廿一日 中山八州江戸ニ還ル、

廿三日? 取調了、村預トナルモノ凡百三十九人、

廿四日 囚人九十七名江戸ニ護送ス可ク早朝出發、護送者合
テ凡七百人松山ニ出、鴻巣ヲ徑テ桶川ニ一宿ス、

廿五日 浦和二午食シ其夜板橋ニ泊ス、

廿六日 入府 四ツ時入府直勤定奉行所ニ到着ノ届アリ、¹⁹

同日 七ツ半時開速、奉行跡部能登守ノ調アリ、夜七半時

閉速、

廿七日 廿人ヤと記セ 留役増田作右衛門調官タリ、夜八時迄、

廿八日 調官全人、

廿九日 調官全 (夜九時入速トアルモ) 夜九ツ半時開速、
イブカシ

此日 豐田 治之助。牢死

イ安生老治之助聞九月九日死ト為ス

此日捌ありて帰村ヲ許サル、モノ凡四十三人、

此後日ニ取調アリテ

治之助、豐吉、歌次郎、万吉、林蔵、清吉等ノ生死
ハイニ抛ル正トス可シ、

九月二日 調アリ、和田長蔵調アリ、

此日 長瀬 (豊吉) 歌次郎。牢死、

イ長セ、豐吉、歌次郎十一月廿八日死

七日 長瀬 万吉。林蔵。清蔵。牢死、

イ清蔵、林蔵ハ聞九月十五日死ト為ス
イ十月廿四日死去、

九月十一日夜五半時開速、奉行ノ捌アリテ長瀬ノ六之丞。菊次

郎。庫吉。二本木ノ万蔵。藤橋ノ熊吉。出牢放免ト
ナル、

全十四日 和田ノ長蔵。病死、

十五日 女影ノ辰次郎。牢死、

十六日 中小坂ノ喜之助。清吉。安十郎。牢死 長瀬ノ富士

太郎。無宿三郎。亦牢死、

十七日 捌アリ釈放ノモノ多シ、下廣谷ノ八五郎。岩蔵。下

鹿山ノ民蔵。栄次郎。安右衛門。野田ノ八百吉。松
山ノ丑五郎。利右衛門。小堤ノ松右衛門。権次郎。

勘左衛門。清吉。高阪ノ秀吉。豐田ノ万十郎。清吉。
源五郎。清次郎。富之助。徳次郎。熊蔵。清八 牢
死、
以下女影ナラン

長瀬ノ新次郎。又七郎。忠蔵。忠七。八五郎。寅松。
六助。幸七。一重次郎。与八兵衛。九右衛門。中小
坂安一郎。重復ス或ハ下廣谷龜五郎亦牢死ト為ル、
他人ノ誤カ

全十九日 調官 留役増田作右衛門、

全廿九日 貞右衛門 牢死、

閏九月三日長吉 牢死、

全月九日 豐田ノ治之助。牢死、

全十五日 長瀬 清蔵。林蔵 牢死、
萬吉

十月 手鎖改アリ、

十月廿四日長瀬萬吉。下廣谷專助。金五郎。病死、

十一月十五日長瀬茂吉。牢死、

廿八日 長瀬豐吉 歌次郎 牢死、²²

極月廿七日手鎖改アリ、

天保辰年正月十七日手鎖改、此頃ノ調官奉行ハ中坊駿河守ナリ
翌

シヤ、

二月十四日下鹿山太七。松山喜三郎。長蔵。小堤紋次郎 病死、

三月十日 小坂清吉。喜之助。豐田ノ万太郎 源五郎等死、

五月十四日捌アリ死殘ノ穢多共彈左衛門ヘ引渡、殘切天窓ト
ザンギリ

為、所追放ニ処セラル、

料 六月十六日係官増田作右衛門、過料金納付済トナリテ事件終

結、

資 翌々巳年弘化二年四月五日 判決申渡アリ、
奉行久須美佐渡守²³

(註24・25・26の各頁には罪狀判決の詳細を記し、これを抹消したる形跡あれども、前記の表と全く同じきをもつて省略す。仲村)

匪狀 遺聞 余少時 嘗テ古老ニ聞けるもの、中忘れ得さりしものをコ、ニ

今ハ何れの処に當るやを知らされと、其當時穢多村の入口、即ち越生毛呂より向ふる可き本道の正面ニ大なる槻樹あり、其上ニ望樓を設け、其処ニ大鼓を置き立番を置きて晝夜交之を警戒し、毛呂方面より來襲すれハ大鼓を乱敲して之を警報することと成し、竹矢來木柵を以て部落の要処をに防禦工事を施し、柵門の出入必ず立番の許可を得て通行する等頗る尽せりと、是れ尾張藩の浪士にて女影部落の小寺ニ隠れて彼等の兒童ニ故ある手習師匠ありて、日頃自ら專學者を以て讀^{る事ありて、之れが}ゆしとなり、暴發の參謀ニ從事したるなりとの遺聞あるも、之を野乘に徵すれハ更ニ其影たになく、又夫れらしき記事も見えず、唯長瀬の犯人中ニ村預と成りしモノニ法昌の名あり、又裁許狀²⁷及騒動記にも無宿三郎の名見ゆるも、孰れも彼浪士某とハ認め難し、又遺聞はハ浪士も一旦捕へられて調官ニ、そなたも武士の流れとして何故に斯かる濁沼ニ陥りたるそ、と痛く嘲笑せられたりとまで

談を傳へたれど……、

此暴挙も彼等に於て永らくの計畫ニ屬して、イツカ事あれかし、ドコニ勃發するも同盟凡て集まり、以て事を發せんと企圖しつゝ有りたるものゝ如しと、故ニ辰匪^{辰瀬の}か越生に暴行せし時なとも随分理不尽の行動を取りて、誰か見ても惡む可き程の乱暴を敢てし、以て強て事を起すを目的と為たる者なるへしと彼の意や寧ろ憐れむ可し、大ニ奮つて暴發迄も為して、終にハ折衝請判の上越生毛呂人^によりの對する多少の地位を高かめ、従前の待遇法を何分か良からしめんが目的なりしものゝ如し、左も有なん、

十月なりしか十一月なりしか、長瀬本拠ニ手入ありし際ニ脱走せる者²⁸多く、三々五々小荷物を負ふて森戸の地を東ニ南に走る者ハ、サナガラ敗軍の落人然たる観ありしと、最盛なりしハ越生ニ囚人を集めた時、之を警固する村々の人、是ハ皆一樣ニ白鉢巻白褌是仕度ありて、各村別々高張押立て、意氣揚る有様ハ壯觀なりしと、

八州前着の二人ニ富田錠之助ハ已ニ老年ニ近く、園部團次郎ハ新進氣鋭の士にて、富田ハ匪徒ニ對する柔順穩和を装いつゝあるニ、園部ハ一氣呵成の大捕縛ヲ斷行する等両々中々の見物ナリシト、

園部團次郎か馬上ニ指揮を取りテ數百人の人夫を驅つて廻行する姿ハ、一廉の大將然として面白相ニ快活ニ從事シアリタリト、²⁹

宮寺清吉の談、『本村と彼部落トハ堺ニ一流水ヲ以テ境ヘリ、通スルニ一橋アリ、此橋ノ此方ニ一商店アリ、屋ト名ツク、其前岸ニ如何サマ巨大ナル楓ヲシキ切株アリテ根部ヲ存シタリシカ、一年許前の水漲ニ此根株頽レテ流中ニ陥リ、永ク邪魔ニサレツ、有リタルカ、夫モ今ハ無シ、其他ノ方面ニ老楓樹アリタル話モ聞カス、随テ其跡ヲシキモノヲモ見受ケタルコナシ』

掘ツテ案スルニ本村ヨリ部落ニ通スル小橋アル処、即チ古来ノ本道ナル可ケレハ、其記ニ大手タル可キ本道ノ要点にアル大楓ノ樹上ニ矢倉ヲ假造シテ云々ノ其望楼ノ跡ハ、□商店前ノ楓根アリシトコロ是ナラント想定スベク、余研究數年ノ不明、初メテ釈クヲ得タランカ、然レ共其断定ハ実地踏査ノ上ナラザル可ラザルナリ、」³⁰

先ニ宮寺清吉ノ談ニ聴キタリシハ何レツナルヤ、其後毛呂行ノ際ニ長瀬ニ出デ、水平村トノ境ナル小流ノ上リヲ過ギテ土地ノ人ニ清談の古カブノアルヤヲ問フ、傍人指シ示シテ二町許リ下流ニ岸ニ傍リテ古キ樹根ノ骸骨のナルモノ重タゲニ半ハ沙中ニ埋マルアリテ、ソレヲ嘗ツテ此岸某店前ノ此岸ニ在リタルヲ、數年前ノ洪水ニ根コジ去ツテ漂流セシナリト云ヘタレハ、是レソノ目的ノ大楓の根株ナラント想定セラル、ヲ得ベシ、然シテ此道ハ爰毛呂方面ヨリノ本道ニシテ、其元古根アリシ云トフ処ノ橋ヲ渡ツテ水平村ニ入ルノ大手口ト見ラル、ナリ、又踏査ノ日ヲ忘ル、後日記ス、

踏査ヲ日誌ニ依テ調べタルモ不明ナリ、^{大正十五年}七月三日カ十月廿一日ナラント思フガ、概ネ前者ナル可シ、而シテ清話ハ其前ニ来リシ時ナル可シ、(全年一月廿八日頃)³¹

(32・33の頁には、高橋貞樹著『特殊部落史』第六版の第七章徳川時代に於ける穢多非人の制度(下)ノ五ノ一節の筆写あれども、これを省略す。仲村)

九梅日誌 天保十四年

八月六日晴 近日暑威嚴峻、越生今市人長瀬穢多祖齋を生せし由、三日の事か、

六日 長瀬村穢多騷、八州改革富田丈之助^介手先の者共今市宿上野村の捕手廿九人を押取籠、穢多共着到八百八人と注さるとだ、篝・高提灯・鎗・鉄砲嚴重に相構、穢多村の口々相固め、大將分ハ^(床枕)将凡にかゝり、さも一廉の一揆を成すとなり、

七日晴 今夜より獅子舞稽古始、人群れハ穢多一揆の談ならざるなし、

八日晴 越生へ富田丈之介出張、穢多共喚び出し世人の者取戻し調へ^{不明}為す、

九日晴 長瀬穢多共妻子引連四十余軒の者各出奔致し噂などあり、

十一日晴 今日園部□□し足人引連、諸方穢多共捕□行、当村杯四五百人隊を成して行けり、女影へ嚮ふとの事、

十二日晴 穢多の談盛なり、」³³